

正 善 庵 遺 跡

津山市東一宮土地区画整理
事業実施に伴う発掘調査

1992

東一宮土地区画整理組合
津山市教育委員会

正 善 庵 遺 跡

津山市東一宮土地区画整理
事業実施に伴う発掘調査



1992

東一宮土地区画整理組合
津山市教育委員会

序

津山市は中国山地内陸部のほぼ中央に位置し、中国自動車道の開通により西日本の東西を結ぶ中核都市として発展してまいりました。さらに近年では中国横断道の整備が着々と進行しており、将来は瀬戸大橋を経由した南北の経済・文化的拠点となる事も期待されております。

さて津山市におきましても、近年の宅地化の波はかなり郊外へと波及してきております。その一環として市内北部の東一宮地区約70haを対象とした土地区画整理が行われる運びとなりました。この対象地内は古代の条里制の水田区域を色濃く残した地域と考えられており、そのため計画段階であらかじめ確認調査を実施したところ、約2万m²にもおよぶ古墳時代の集落推定地が考えられました。今回は3年計画でその推定集落地域内の道路部分の調査を実施いたしました。その結果、縄文時代から中世にいたる長期にわたって集落が営まれていた事が判明いたしました。特に平野部での古墳時代集落が発見された事で今後の集落研究が大いに期待されます。また美作国の一宮として名高い中山神社が近くに存在する事から、中世の時期にもかなりの集落が営まれていた事が予想されます。今後の調査でそれらが徐々に解明されるものと考えられます。

ここに発掘調査が終了致しましたので、ささやかではございますが情報をいちばん早く公表したいと言う立場から報告書を刊行いたしました。各位の御活用をいただければ幸甚であります。

なお末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大なる御協力をいただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月31日

津山市教育委員会

教育長 森 定 貞 雄

例　　言

1. 本書は津山市東一宮土地区画整理事業実施に伴う正善庵遺跡の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査経費はすべて東一宮土地区画整理組合が負担している。
1. 発掘調査は3次にわたって行われた。1次調査を平成元年6月22日から11月1日、2次調査を平成2年6月20日から10月26日、3次調査を平成3年6月18から10月4日まで実施した。1次調査を津市教育委員会文化課・津山弥生の里文化財センター次長中山俊紀が2・3次調査を同主任小郷利幸が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また方位は磁北である。
1. 本書第1図に使用した「周辺遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山東部、津山西部）を複製したものである。
1. 本書の執筆・編集は小郷が担当した。中世土器の実測など中世土器全般にわたって文化財センター職員平岡正宏の協力を得た。
1. 発掘調査及び遺物整理には赤松百合子、日笠月子、野上基子、岩本えり子、家元博子、岡田美牟子、赤坂博子、中谷幸子、田中裕子の協力を得た。
1. 本書には遺構の略称を使用している。略称名は次の通りである。
S H：住居跡、S B：建物跡、S A：櫛列、S D：溝、S K：土壙、P：柱穴
1. 出土遺物・図面等は津市教育委員会・津山弥生の里文化財センターで保管している。

本文目次

| | | |
|-----|-------------|----|
| I | 遺跡の立地と周辺の遺跡 | 1 |
| 1 | 遺跡の立地 | 1 |
| 2 | 周辺の遺跡 | 1 |
| II | 調査の経過 | 3 |
| 1 | 調査に至る経過 | 3 |
| 2 | 調査経過 | 3 |
| 3 | 調査体制 | 5 |
| III | 調査の記録 | 9 |
| 1 | 第1次調査の記録 | 9 |
| (1) | 縄文時代の遺物 | 9 |
| (2) | 弥生時代の遺構・遺物 | 11 |
| (3) | 古墳時代の遺構・遺物 | 11 |
| (4) | 中世の遺構・遺物 | 18 |
| 2 | 第2次調査の記録 | 23 |
| (1) | 古墳時代の遺構・遺物 | 23 |
| (2) | 中世の遺構・遺物 | 29 |
| 3 | 第3次調査の記録 | 33 |
| (1) | 弥生時代の遺物 | 33 |
| (2) | 古墳時代の遺構・遺物 | 33 |
| (3) | 中世の遺構・遺物 | 37 |
| IV | まとめ | 48 |
| 1 | 縄文時代の遺物について | 48 |
| 2 | 弥生時代の遺物について | 48 |
| 3 | 古墳時代の集落について | 49 |
| 4 | 中世の集落について | 52 |

挿 図 目 次

| | | | |
|---------------------------------|-------|-----------------------|-------|
| 第1図 周辺遺跡分布図 | 2 | 第32図 建物4平・断面図 | 30 |
| 第2図 正善庵遺跡古墳時代集落推定範囲 及び調査区位置図 | 4 | 第33図 遺構に伴わない出土遺物1) | 30 |
| 第3図 正善庵遺跡周辺小字名図 | 5 | 第34図 遺物に伴わない出土遺物2) | 30 |
| 第4図 調査区グリッド配置図 | 6 | 第35図 第3次調査遺構全体図 | 31~32 |
| 第5図 第1次調査遺構全体図 | 7~8 | 第36図 遺構に伴わない出土遺物 | 33 |
| 第6図 調査区土層図 | 9 | 第37図 住居8平・断面図 | 34 |
| 第7図 繩文時代の遺物 | 9 | 第38図 住居8、土壤14出土遺物 | 34 |
| 第8図 住居1平・断面図 | 10 | 第39図 土壤14平・断面図 | 35 |
| 第9図 住居1及び遺構に伴わない出土遺物 | 10 | 第40図 遺構に伴わない出土遺物 | 35 |
| 第10図 住居2平・断面図 | 12 | 第41図 第3次調査遺構部分図 | 36 |
| 第11図 住居2出土遺物 | 12 | 第42図 建物5平・断面図 | 37 |
| 第12図 住居3平・断面図 | 13 | 第43図 棚列1~6平・断面図及び出土遺物 | 38 |
| 第13図 住居3出土遺物(1) | 14 | 第44図 清8、土壤18~19平・断面図 | 39 |
| 第14図 住居3出土遺物(2) | 15 | 第45図 清9平・断面図及び出土遺物 | 40 |
| 第15図 住居3出土遺物(3) | 16 | 第46図 土壤15平・断面図 | 41 |
| 第16図 住居3出土遺物(4) | 17 | 第47図 土壤16平・断面図 | 41 |
| 第17図 住居4平・断面図 | 17 | 第48図 土壤17平・断面図及び出土遺物 | 41 |
| 第18図 住居4出土遺物 | 18 | 第49図 土壤21平・断面図及び出土遺物 | 42 |
| 第19図 建物1平・断面図 | 19 | 第50図 土壤22平・断面図 | 43 |
| 第20図 中世遺物 | 20 | 第51図 土壤23平・断面図 | 43 |
| 第21図 第2次調査遺構全体図 | 21~22 | 第52図 土壤22、23出土遺物 | 43 |
| 第22図 第2次調査遺構部分図 | 23 | 第53図 柱穴2~5平・断面図 | 44 |
| 第23図 住居5平・断面図 | 24 | 第54図 柱穴2~7出土遺物 | 45 |
| 第24図 住居6平・断面図 | 24 | 第55図 柱穴6平・断面図 | 46 |
| 第25図 住居5~6出土遺物 | 25 | 第56図 柱穴7平・断面図 | 46 |
| 第26図 住居7平・断面図 | 25 | 第57図 遺構に伴わない出土遺物1) | 47 |
| 第27図 土壇1、5、6、8~10平・断面図 | 26 | 第58図 遺構に伴わない出土遺物2) | 46 |
| 第28図 柱穴1平・断面図 | 27 | 第59図 古墳時代須恵器分類図 | 50 |
| 第29図 土壇及び遺構に伴わない出土遺物 | 28 | 第60図 正善庵遺跡古墳時代集落配置図 | 51 |
| 第30図 建物2平・断面図 | 29 | 第61図 正善庵遺跡中世集落配置図 | 51 |
| 第31図 建物3平・断面図 | 29 | 第62図 上師賀土器法蓋分布図 | 53 |

I 遺跡の立地と周辺の遺跡

1 遺跡の立地

正善庵遺跡は岡山県津山市東一宮字正善庵563番地他に所在する。津山市街地を吉井川の支流宮川がほぼ南北に流れている。この川に沿って約4km程上流へ北上すると宮川の源流は2枝に別れている。その一方の横野川両岸には三方を山に囲まれた津山でも有数の水田耕作地帯が広がっている。遺跡はその南辺中央に位置している。周辺の標高は、130~135mである。

2 周辺の遺跡

本遺跡周辺の丘陵上には、弥生時代の集落跡として単位集団の基本モデルとなった沼遺跡（註1）や大田十二社遺跡（註2）、京免・竹ノ下遺跡（註3）、アモウラ遺跡（註4）などが、墳墓遺跡として上原遺跡（註5）、椎現山遺跡（註6）、下道山遺跡（註7）などが立地する。古墳としては前方後円墳の下横野丸山古墳（註8）、帆立貝式の大野木塚古墳（註9）などがある。また本遺跡の北方には俗称“熊の頭”と呼ばれる高まりが水田中に残っている（畠中塚古墳）。地元の話によると周辺を削る際に石が出土したらしく、かなり変形はしているものの直径20mぐらいの円墳の可能性が大きい。古代になると美作国の大府（註10）が總社の辺りに置かれる。また美作国の一宮として名高い中山神社が、本遺跡の西0.5kmに現存し中世以降栄えてきた。さらに南西の山頂には中世山城の神楽尾城跡（註11）が存在し現在整備されている。近世になると津山城が築かれ明治維新までの約260年間森・松平の両氏によって支配された。

（註1）近藤義郎他「津山弥生住居址群の研究」『津山郷土館考古学研究報告第2号』津山市・津山郷土館 1957年

（註2）河本清・中山俊紀・安川義史「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会 1981年

（註3）中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会 1982年

（註4）1981~82年広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が発掘調査を実施、報告書未刊。隣接するアモウラ東遺跡も調査されている。行田裕美「アモウラ東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第36集』津山市教育委員会 1990年

（註5）1966~67年岡山大学考古学研究室が発掘調査、報告書未刊。

（註6）1976~77年津山市教育委員会が発掘調査。『図録 津山の史跡』津山市教育委員会 1987年

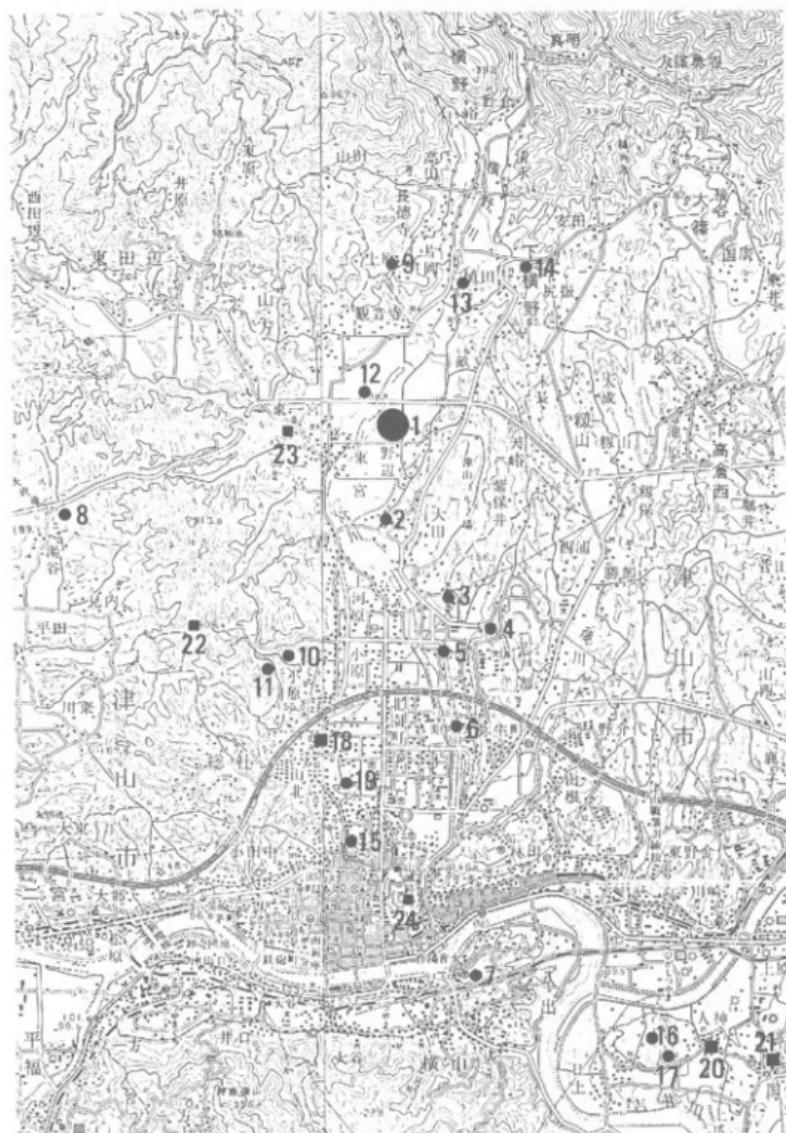
（註7）栗野克己・岡本寛久「下道山遺跡緊急発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』岡山県教育委員会 1977年

（註8）『全國遺跡地図 岡山県』文化庁 1985年、円墳の可能性もある。

（註9）『津山市史 第一巻 原始・古代』津山市史編さん委員会 1972年、須恵器、鉄器が出土している。

（註10）岡田博他「美作国大府」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』岡山県教育委員会 1973年、安川豊史「美作国跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集』津山市教育委員会 1984年

（註11）市内で最大規模の中世山城、市指定の史跡。



- 1.正善庵遺跡
2.熱敷試驗場跡内遺跡
3.大田十二社遺跡
4.沼遺跡
5.京免遺跡
6.竹の下遺跡
7.八出銀山遺跡
8.アモウラ遺跡
9.上野遺跡
10.龜山遺跡
11.下道山遺跡
12.椎中塙古墳
13.下横山丸山古墳
14.大野木麻吉跡
15.十六夜山古墳
16.日上牧山古墳群
17.日上天王山古墳
18.美作國府跡
19.高麗谷遺跡
20.美作國分尼寺跡
21.美作國分寺跡
22.神尾尾城跡
23.中山神社
24.津山城跡

第1図 周辺遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

II 調査の経過

1 調査に至る経過

津山市東一宮地区の土地区画整理事業実施の計画が具体化したのは昭和62年の事である。同年4月津山市都市計画課から津山市教育委員会に、その計画範囲内の文化財の有無に関する照会があり、その対象地は周知の遺跡ではないものの、古代の条里制の地割りが良好に依存すると考えられるため分布調査の必要の旨を回答した。その後東一宮地区区画整理準備組合、津山市建設部、同教育委員会の三者が協議し、昭和63年11月1日に津山市東一宮地区区画整理組合が発足と同時に同組合と覚書を締結し、埋蔵文化財の確認調査にはいった。その詳細については既に報告され（註1）、その確認調査結果を元に約5万m²にも及ぶ古墳時代の集落推定範囲を決定した（第2図）。その後同三者協議の末、3年計画で集落推定範囲内にかかる道路部分の調査を行う事とした。なお遺跡名は大部分に含まれる小字名「正善庵」をとり、正善庵遺跡と呼称する事とした（第3図参照）。

（註1） 中山俊紀「津山市東一宮地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書」[津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第32集] 津山市教育委員会 1990年

2 調査経過

第1次調査は、集落推定範囲の西端にあたる部分で確認調査時に古墳時代の住居跡の一部が検出されていた。平成元年6月22日から重機による表土剥ぎを、7月4日から遺構の検出を行った。中世・古墳時代の遺構面までをほぼ全城にわたって検出し一部縄文・弥生時代の包含層まで可能な限り掘り下げ遺構の検出に努めた。調査が終了したのは11月1日で、その後平成2年3月31日まで整理作業を行った。調査面積は約2,700m²である。

第2次調査は、集落推定範囲の東端にあたる部分である。平成2年6月20日から重機による表土剥ぎを、6月25日から遺構の検出を行った。全城にわたって古墳時代の遺構面までの検出を行ったが、前年度に比べ遺構の密度は少なくさらに下層の縄文時代包含層は検出していない。調査は10月26日に終了し、平成3年3月31日まで整理作業を行った。調査面積は約3,105m²である。

第3次調査は、第1・2次調査の間を結ぶ部分で平成3年6月18日から重機による表土剥ぎを、6月21日から遺構の検出を行った。前年度同様全城にわたって古墳時代の遺構面まで検出し可能な限り縄文時代の包含層の検出に努めたが検出されなかった。調査は10月4日に終了し調査に平行して整理作業を行った。調査面積は約3,400m²である。



第2図 正善寺遺跡古墳時代集落地定義用及び鍍金区位置図 (S=1:3,000)

3 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は次ぎの通りである。

発掘調査主体 津山市教育委員会 教育長 萩原賢二(～H3.6.25)、森定貞雄(H3.7.12～)



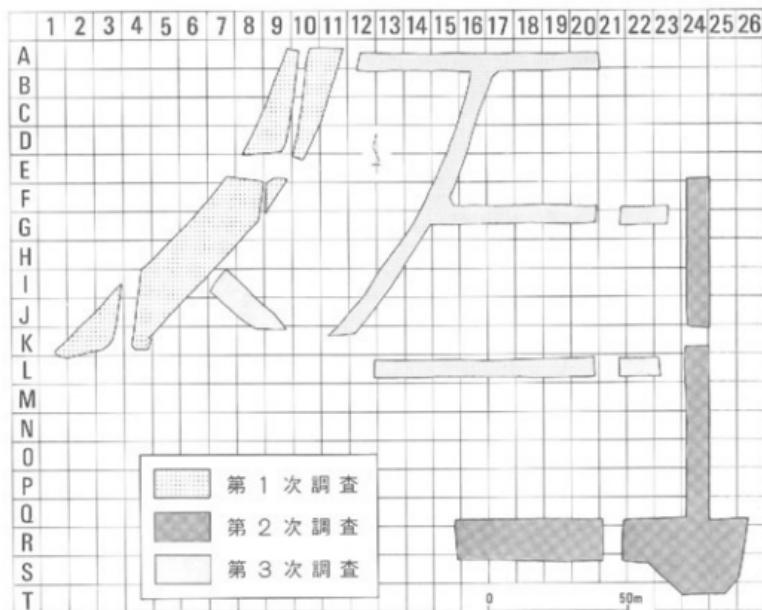
第3図 正善庵遺跡周辺小字名図

教育次長 藤田公男（～H3.3.31）、村上光（H3.4.1～）
 文化課長 須江尚志（～H3.3.31）、日下泰洋（～H3.5.31）
 森元弘之（H3.6.1～）
 文化財センター 所長 須江尚志（H3.6.1～）
 次長 中山俊紀（H3.6.1～、第1次調査担当）
 主事 小郷利幸（第2・3次調査担当）

発掘作業員 青野英夫、石原睦美、一岩政志、岡田賀代、織田勝正、神田悦夫、神田照子、坂上静子、坂出農一、坂出安、田中善文、松村克巳、田口喜美子、武川公子、谷口虎雄、寺崎辰治郎、永田貴美子、永礼光恵、日笠郁枝、松村竹子、水島いさ子、頼経実、高谷祥敬、高谷秀二、福井重夫、前田泰明、三牧伸治、山根徹也、角田由美

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで下記の方々の指導、助言、協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

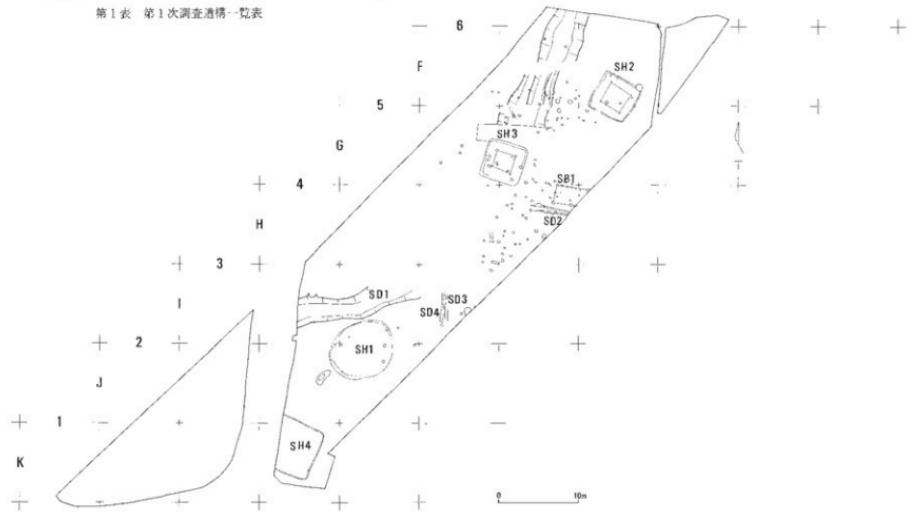
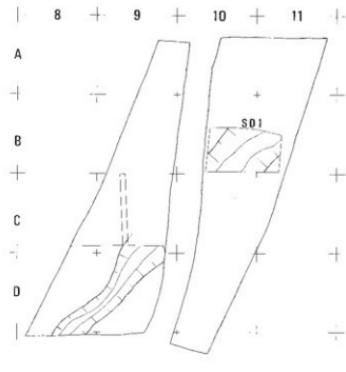
伊藤 見、植野浩三、大澤正巳、田中清美、仁木康治、福田正継、韓式系土器研究会の皆さん



第4図 調査区グリッド配置図 (S = 1 : 2,000)

| 発生時代 | 位 置 | 備 考 |
|-----------|----------|----------------------|
| SH1 (住居1) | I・J-4・5区 | 長辺8.5m、短辺7mの稍円形 |
| SD1 (溝1) | ほぼ全城 | 最大幅7m、深さ0.4m、河川? |
| 古 墓 時 代 | | |
| SH2 (住居2) | F・G-8区 | …辺5.3mの方形、4本柱 |
| SH3 (住居3) | G-6・7区 | …辺5.2mの方形、4本柱 |
| SH4 (住居4) | J・K-4区 | 一边6.9mの方形、一部調査区外 |
| 中 樹 | | |
| SB1 (建物1) | H-7・8区 | 2間×2間、一部調査区外 |
| SD2 (溝2) | H-7区 | 幅0.7m、残長4.5m、深さ0.1m |
| SD3 (溝3) | I-6区 | 幅0.4m、残長3.4m、深さ0.05m |
| SD4 (溝4) | I-6区 | 幅0.4m、残長4.4m、深さ0.05m |

第1表 第1次調査遺構一覧表



第5図 第1次調査遺構全体図 (S=1:500)

III 調査の記録

調査区には10m間隔のグリッドを設定し南北をアルファベット（A～T）、東西を数字（1～26）で表記している（第4図）。調査区の基本層序は、耕作土（第6図1）、中世包含層（同3）、その下にはほぼ全域にわたって中世遺構面が存在する。中世以降の段階で横野川の氾濫によると思われる礫や砂の堆積が部分的に見られ、その影響で中世遺構もかなりの削平を受けている。その下には古墳時代の包含層（同4）と遺構面が調査区北西と南東側の部分にのみ見られるが、遺構が見られない部分は河川の氾濫による削平の影響をかなり受けているものと思われる。さらにその下層は、弥生時代中期（同5）及び縄文時代晩期（同6）の包含層が部分的に存在するが遺構面の検出はされていない。弥生時代から古墳時代にわたる時期にも川の氾濫による礫・砂の堆積が見られ、このように幾度となく川が氾濫しその度に整地を行い生活面を形成しているようであり、特に中世の時期には調査区北西部ではかなりの広範囲の整地を行っている。

1 第1次調査の記録

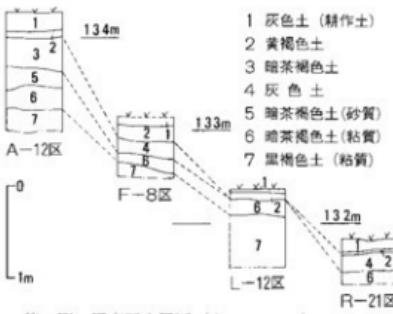
主な遺構は弥生時代の住居跡1、古墳時代の住居跡3、中世の建物跡1、溝3などがある。遺物としては、上記時代以外として縄文土器片が数点出土している。

(1) 縄文時代の遺物（第7図）

縄文時代の遺構は検出されていない。遺物は少量で散在的に出土しているがそれほど摩滅をしていない事から周辺に遺構の存在が考えられる。1・2・3は口縁がやや外反する深

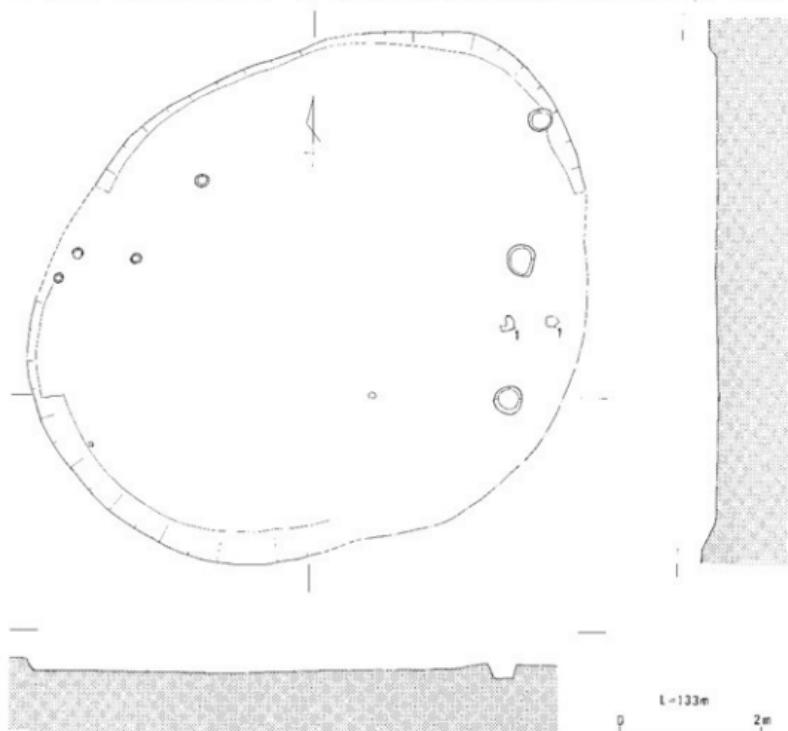


第7図 縄文時代の遺物（1～5…S=1:3、6…S=1:2）

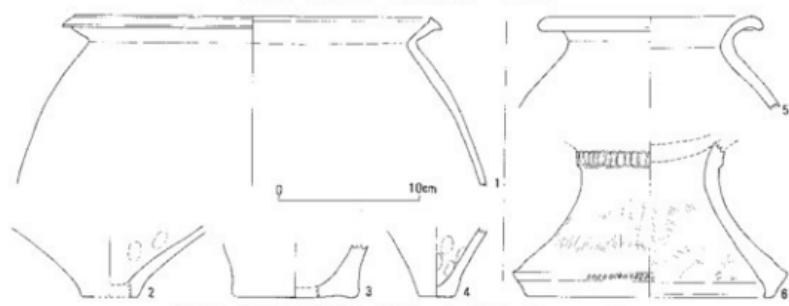


第6図 調査区土層図（S=1:600）

鉢で口縁端部に刻み目を胴部外面には爪形文を施している。4も深鉢であるが刻み目を施した突帯が縦・横方向に巡り区画をなし、その中にヘラ状工具で線刻を施している。5は2条の沈線が巡りその間に繩文を施している。6は石鎚で先端部を欠損する。石材はサスカイトである。



第8図 住居1平・断面図 (S-1 : 80)



第9図 住居1及び遺構に伴わない出土遺物 (S = 1 : 4)

(2) 弥生時代の遺構・遺物

住居1（第8・9図）

I・J-4・5区、住居跡と考えられる楕円形をした遺構である。長径8.5m、短径7m、深さ25cmを測る。床面精査にもかかわらず本住居に伴う柱穴は検出されていない。また、壁に沿った壁溝も存在しない。床面などから弥生土器片が出土している。出土土器はいずれも細片である。第9図1～4が本住居に伴うものである。1は口縁がくの字に外反する壺で復元口径25.6cm、残存高12cmを測り図示していないが胴部片も出土している。2～4は壺ないしは壺の底部で内部に指頭圧痕が見られるものもある。

溝1（第5図）

調査区のはば全域にわたって北東から南西に流れる自然の流路（川？）である。残存部分で最大幅7m、深さ40cm程を測る。出土遺物や古墳時代の住居跡に切られている事などから弥生時代頃から存在し古墳時代には埋没しているものと考えられる。

遺構に伴わない遺物（第9図）

5・6は包含層内出土で5は壺の口縁部で復元口径14cm、6は台付鉢の底部で底径16.6cmを測る。上部との接合部外面に指頭痕が脚部端には刺突列点文が巡っている。内・外面ともハケ調整である。

(3) 古墳時代の遺構・遺物

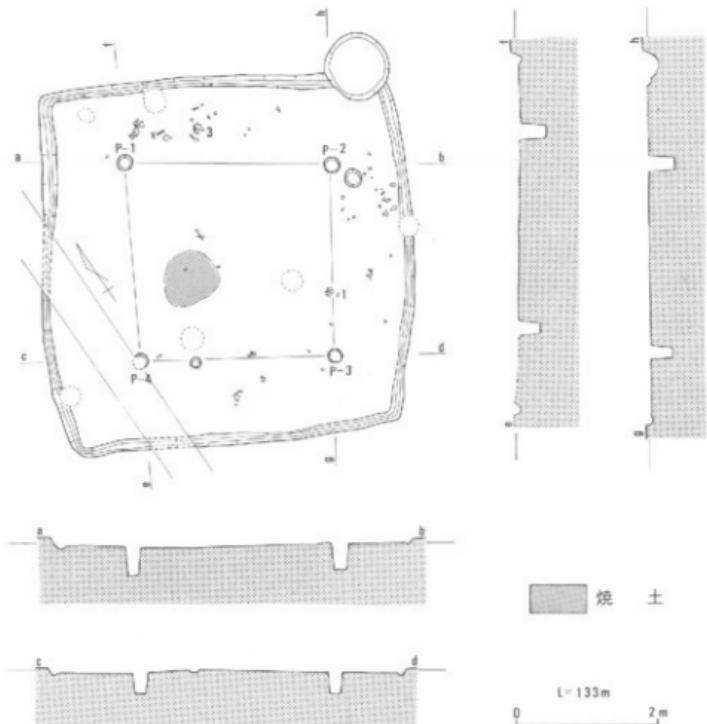
住居2（第10・11図）

F・G-8区に存在する一辺5.3m程の方形住居跡である。後世の削平を受けているため深さは8cmと浅い。壁に沿って幅15cm程の壁溝が全周している。主柱は4本（P-1～4）で中央やや西よりに焼上面がある。P-1～2間は2.95mを測る。東側コーナーで切り合っているやや大きめの円形ピットは、中に拳大の石が充満していただけで出土遺物が皆無である事から、本住居に伴うものかは不明である。埋土及び床面から土師器・須恵器片が出土している。

土師器は細片であるため須恵器のみ図示した（第11図）。1は杯蓋で口径15.6cm、器高4.9cm、天井部との境に若干の稜を残し、天井部3分の1程に回転ヘラ削りを施している。2・3は杯身である。いずれも口径12～13cm、3は器高4.6cmを測り底部はヘラ切り未調整で平らになっており、内面にタタキの當て具痕が残る。1・2がセットである。

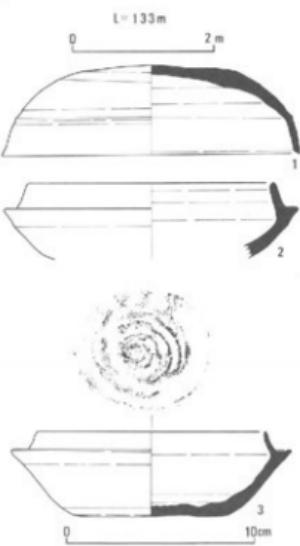
住居3（第12～16図）

F・G-6・7区に存在する一辺5.2m、深さ30cm程の方形住居跡である。壁に沿った幅30cm程の壁溝は全周せず南側では消滅している。主柱は4本（P-1～4）である。P-1～2間は2.45mを測る。本住居は火災にあったらしく埋土内にはおびただしい数の土師器と須恵器が残されていた。出土した土師器・須恵器は可能な限り図示したが、本来の個体数はさらに増えるものと思われる。

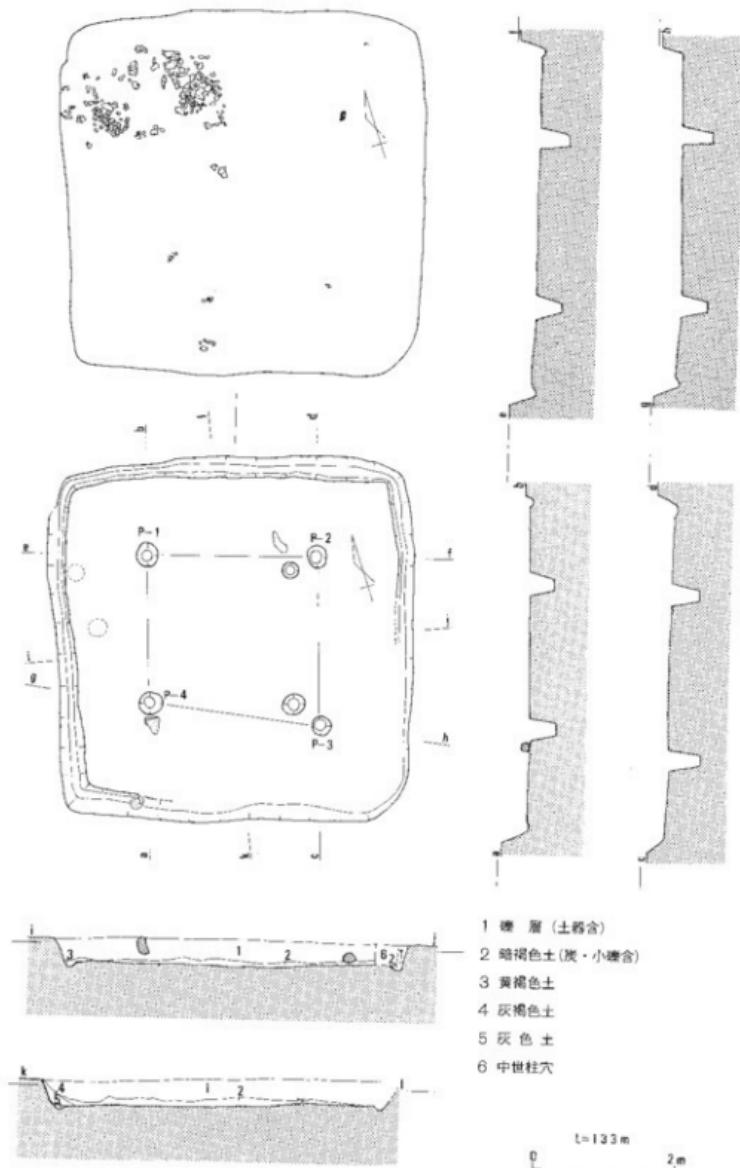


第10図 住居2平・断面図 ($S = 1 : 80$)

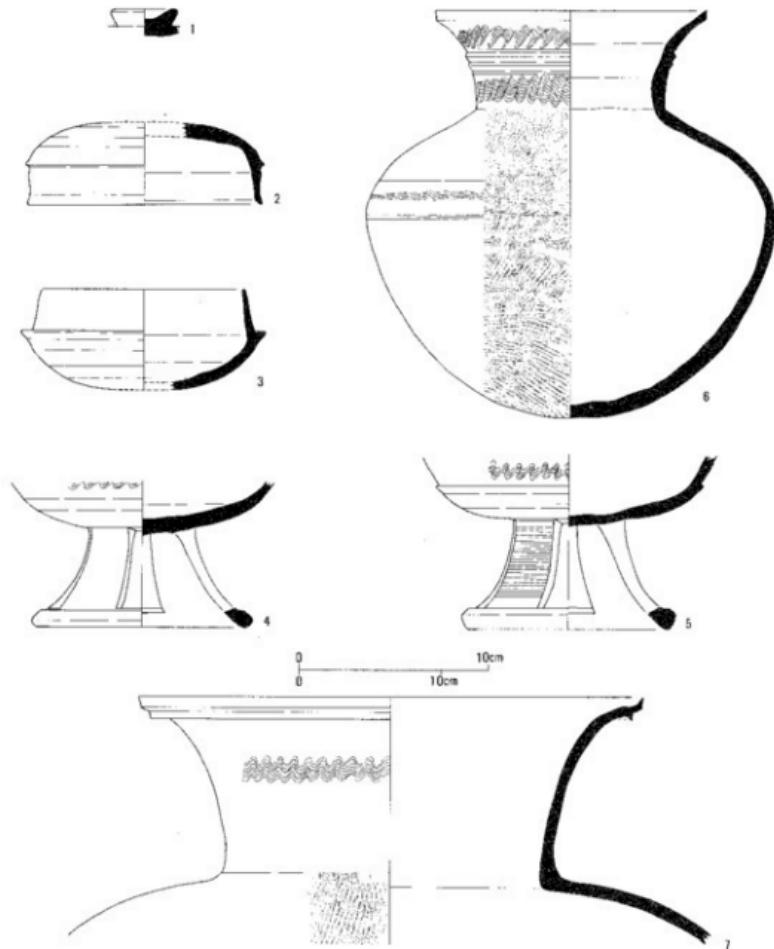
須恵器（第13図）の内1は有蓋高杯蓋のつまみで中央が窪んでいる。2は杯蓋ないしは有蓋高杯の蓋で口径12.5cm、器高4.4cmを測り、天井部との境に突出した稜をもち天井部半分程に回転ヘラ削りを施している。2には1の様なつまみがつく可能性が考えられる。ちなみに1と2は焼成が異なり別個体である。3は杯身である。復元口径10.5cm、器高5.3cmを測る。底部の半分程に回転ヘラ削りを施している。4・5は無蓋の高杯でいずれも口縁部は欠損している。杯部には波状文を施し、脚部の透しは4方向で方形を呈し、5にはカキ目を施している。6は蓋ではほぼ完形に復元できる。口縁端部はやや上部につまみ上げ、頸部には2段



第11図 住居2出土遺物 ($S = 1 : 3$)



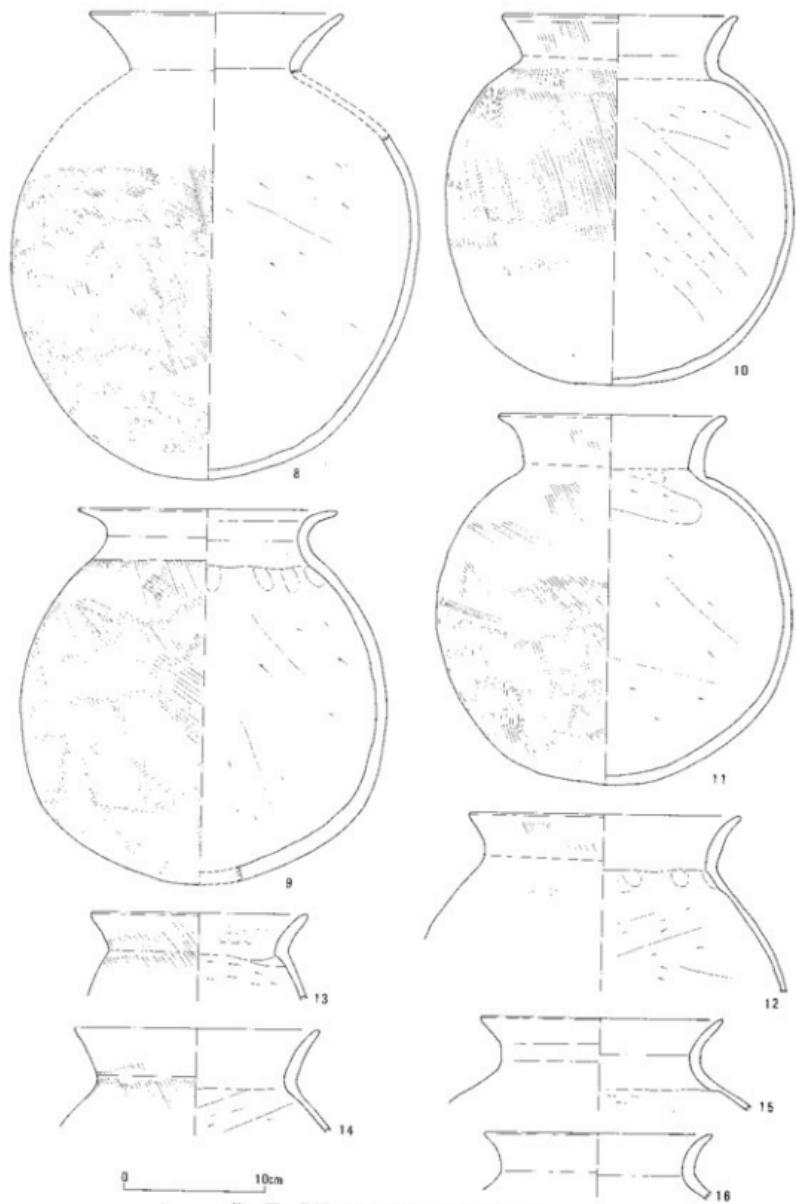
第12図 住居3平・断面図 ($S = 1 : 80$)



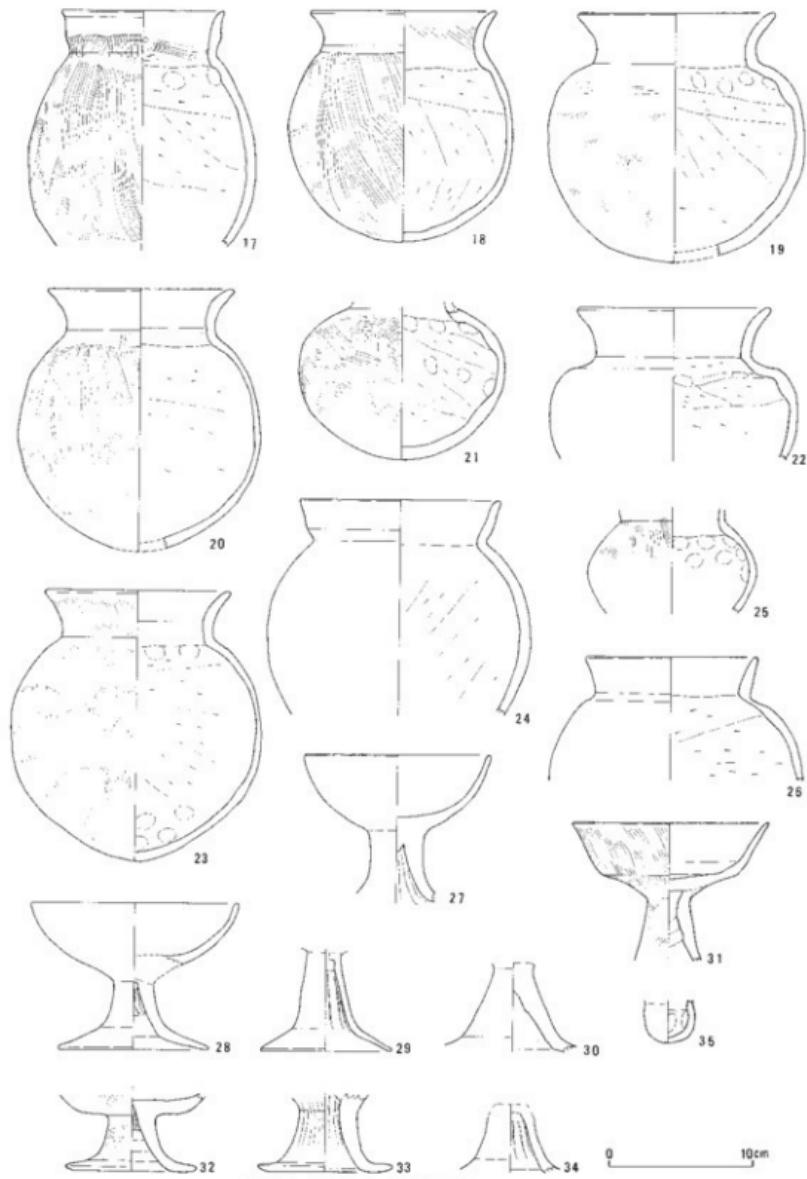
第13図 住居3出土遺物(1) (1~6…S=1:3, 7…S=1:4)

に波状文がさらに脇部中央には沈線で区画された中にやや粗雑な波状文が巡っている。脇部下半には平行タタキ目痕が残るが内部は當て具痕を撫で消している。7は大甕の頸部である。口縁端部はややシャープに上方につまみ上げている。頸部外面には波状文が巡り脇部外面には平行タタキ目が、内面には當て具痕が撫で消しているものかすかに観察できる。

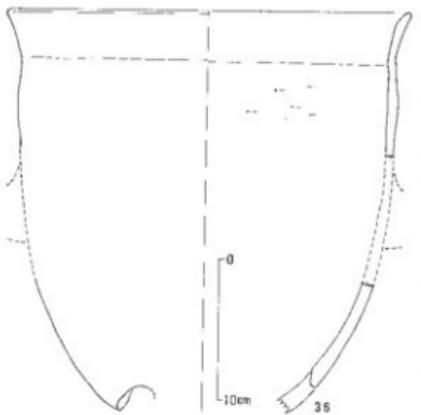
土師器(第14~16図)の大部分は北西コーナー付近から出土している。8~26が甕で大形(8~12)、小形(17~26)に大まかに分類でき、さらに小形の中にはやや肩が張り脇部が球形に



第14図 住居3出土遺物(2) ($S = 1 : 4$)



第15図 住居3出土遺物(3) (S = 1 : 4)

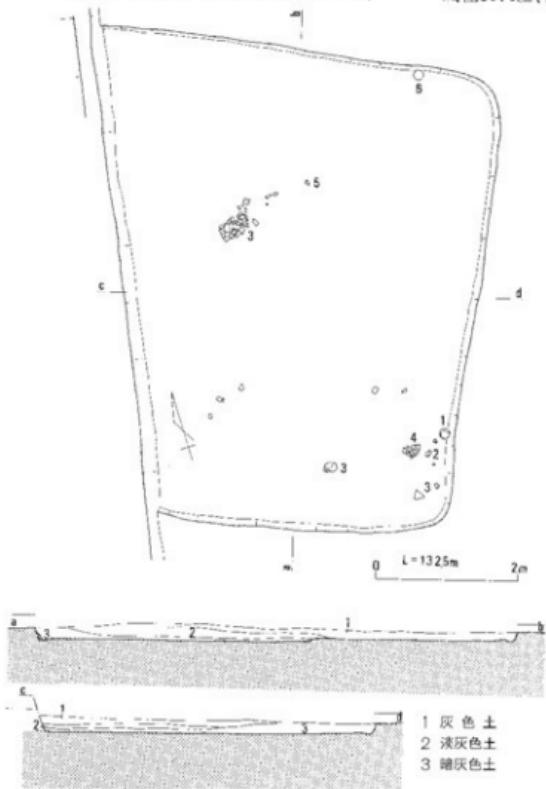


第16図 住居3出土遺物(4) ($S = 1 : 4$)

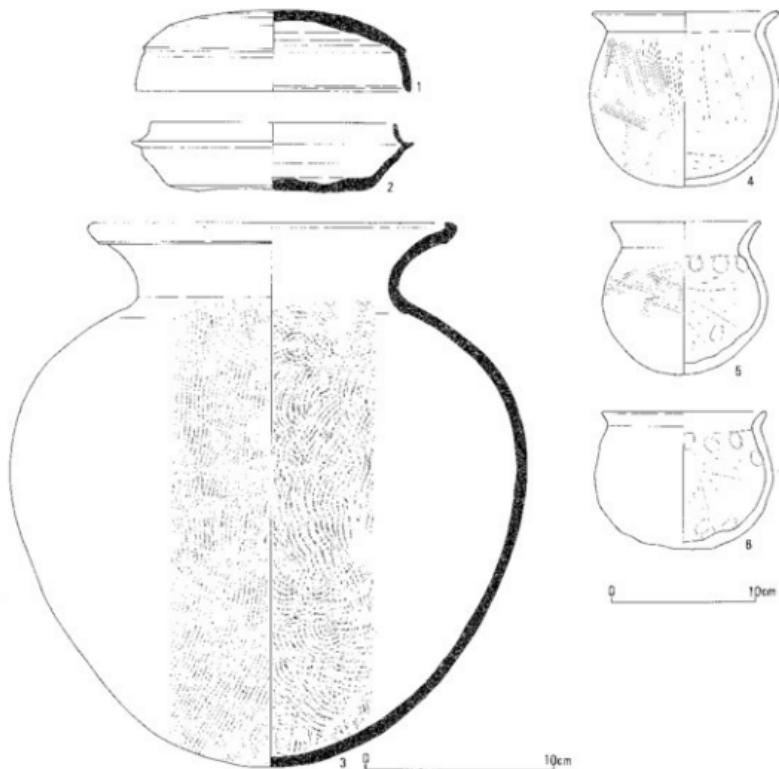
近いもの(19・22)、胴が卵形に近いもの(17)がある。8は口径17.4cm、復元高33.8cm、10は口径16cm、器高26.9cm、18は口径13cm、器高16.4cm、19は口径13.4cm、器高18.1cmを測る。壺はいずれも外表面はハケ、内面はヘラ削りを施している。高杯(27～34)は杯部が椀状に丸くなるもの(27・28)、屈曲をもって外反するもの(31)に大別できる。脚部の形態もくの字に曲がり接地面の少ないもの(28・29)、接地面の多いもの(32・33)がある。28は口径14.4cm、底径10.4cm、器高10.7cm、31は口径13.6cm、残存高10.1cm、32は底径8.2cm、残存高5.7cmを測る。35は小形の上器である。36は壺で破片からの復元である。復元口径28cm、復元高29cm程度底部には円形の透しが観察されるが全体像は不明である。

住居4 (第17・18図)

J・K-4区にある一辺6.9m、深さ14cm程の方形住居跡であり、約4分の1程は調査区外にあたる。壁に沿った明瞭な溝は持たず柱穴も検出していない。埋土及び床面から須恵器・上器・鐵滓が出土している。出土した須恵器・上器は6個体で第18図に図示してある。1は杯蓋2は杯身でセットとなる。1は口



第17図 住居4 平・断面図 ($S = 1 : 80$)



第18図 住居4出土遺物 (1~3…S=1:3、4~6…S=1:4)

径14.2cm、器高4.4cmを測り、天井部との境に若干の棱を残し、天井部2分の1程に回転ヘラ削りを施している。2は口径12.8cm、底径8.9cm、器高3.7cmで底部はヘラ切りのままで半である。3は壺で口縁端部を内側につまみ上げている。胴部外面に平行タタキ目、内面に当て具痕が残る。4~6は土師器の小形土器で口径10.4~12.6cm、器高9.7~12.7cmを測り、胴部外面にハケ目、内面にはヘラ削痕と指頭圧痕が観察される。また、長さ8cm程の鉄滓2点が須恵器1・2周辺の床面付近から出土している。分析の結果、鉱石系の鍛練銅冶津である(註1)。

(4) 中世の遺構・遺物

建物1 (第19図)

H-7・8区に存在する建物跡で現状で梁脚2間、桁行2間であるが、さらに調査区外に続く可能性もある。桁行方向はほぼ東西であり各柱の心々間はa-b間が1.8、2.1m、c-d間が2.3m、e-f間が1.0、1.3mである。少量の土器片が出土している。

溝 2 (第5図)

H-7区、建物1の南に平行して存在する。幅0.7m、現長4.5m、深さ0.1mを測る。位置関係から建物1に伴う施設の可能性もある。

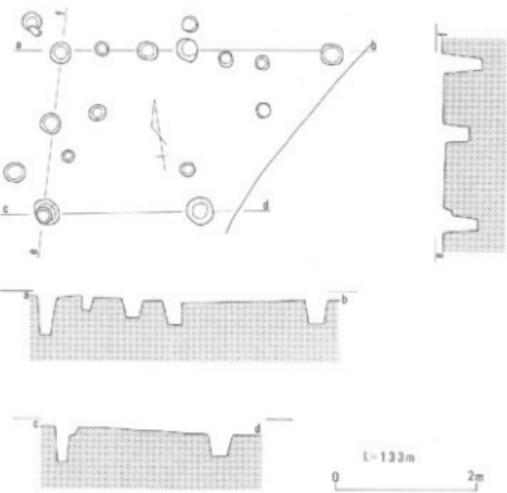
溝 3・4 (第5図)

I-6区、ほぼ南北に平行する溝である。いずれも幅40cm、現長3.4~4.4m、深さ5cmを測る小溝である。

遺構に伴わない遺物(第20図)

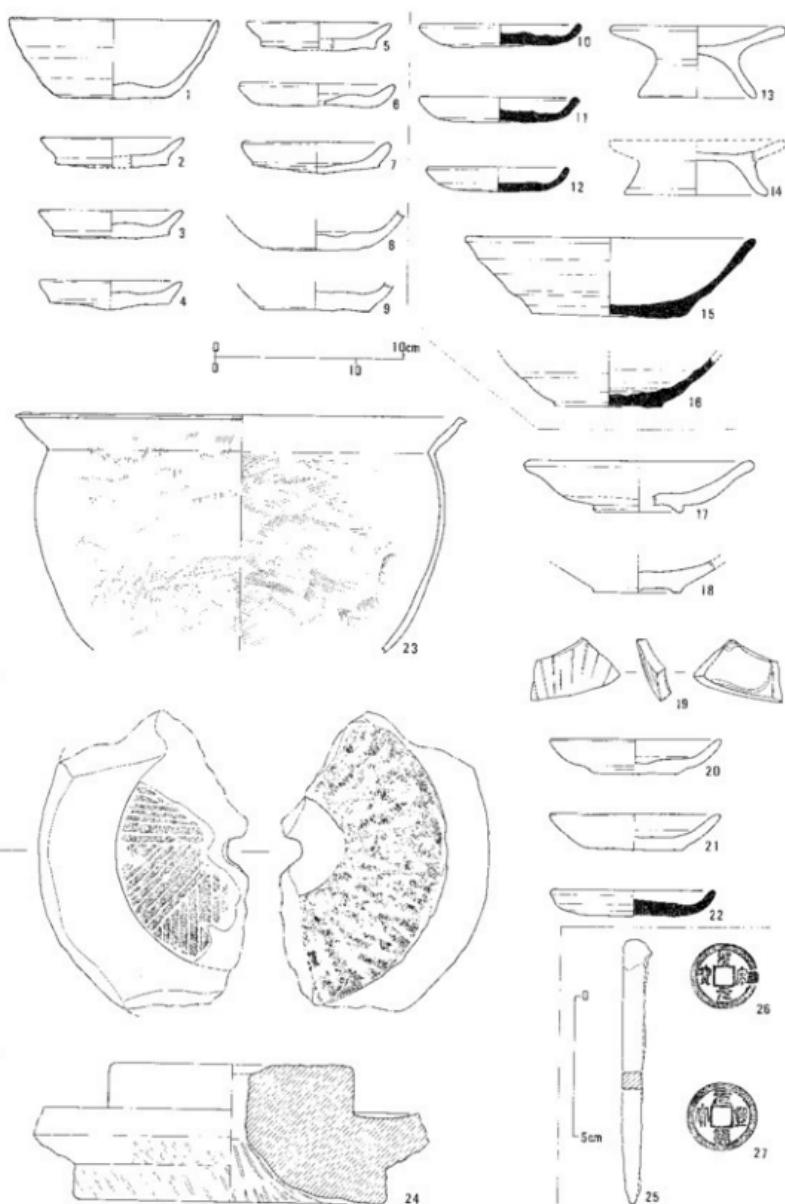
1~9及び10~16はG-7・8区の柱穴から一括で出土している。しかしこれら柱穴は建物などを構成していない。1・8・9は土師質の杯で1は口径11cm、底径5.6cm、器高5.2cm、2~7は土師質の小皿で3は口径7.6cm、底径6.3cm、器高1.5cm、13・14は土師質の台付小皿で13は口径8.8cm、底径6cm、器高3.9cm、10~12、15・16は勝間田焼の小皿と碗であり、10は口径8cm、底径5.3cm、器高1.2cm、15は口径14.8cm、底径8.2cm、器高4.2cmを測る。17・18は高台付碗で17は口径11.8cm、底径4.1cm、器高2.7cmを測り内外面に施釉を18は内面のみ施釉している。18は志野焼の可能性がある。19は青磁碗片で外面に細蓮弁文が観察できる。20・21は土師質の小皿、22は勝間田焼の小皿である。23は土師質の鍋で口径31.4cm、残存高16.6cmを測り内外面にハケが施されている。24は石臼片で上面に線刻がなされている。25は鉄釘で長さ9.3cm程で断面は方形である。26・27は北宋銭で26は「聖宋元宝」(初鑄1101年)、27は「元豐通宝」(初鑄1078年)でこれら古銭は12枚程が重なって一括で出土している。

(註1) 分析は新日本製鐵の大澤正巳氏による。成果はあらためて公表される。



第19図 建物1 平・断面図 (S = 1 : 80)

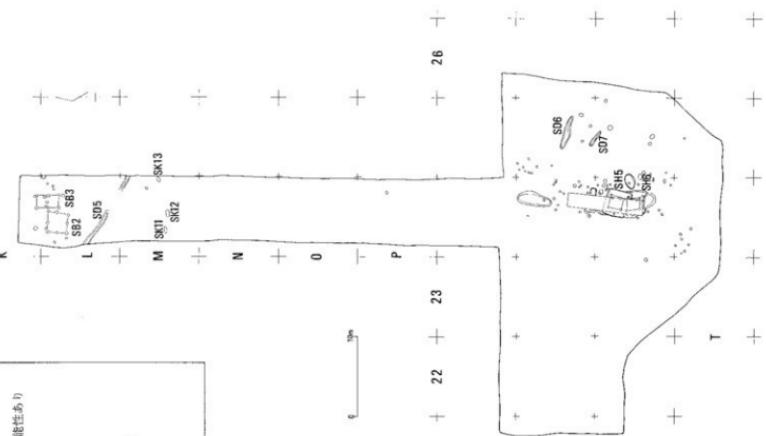
— 19 —



第20図 中世遺物 (1~22…S = 1 : 3、23・24…S = 1 : 4、25~27…S = 1 : 2)

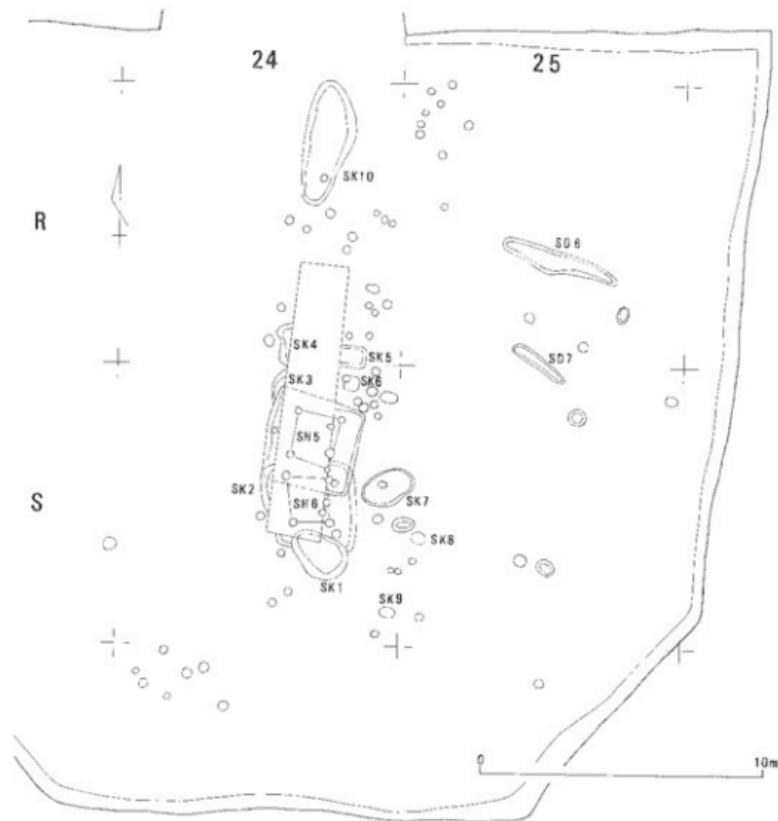
| 古墳時代 | 位 置 | 地 形 | 考 |
|----------------|------------|-----------------------|---|
| S H 5 (土塁 5) | S -24区 | -223.4mの方形、4本柱 | E |
| S H 6 (土塁 6) | S -24区 | -223.3mの方形、4本柱 | + |
| S H 7 (土塁 7) | R -16 -17区 | 長224.2m、幅道3m、隅丸方、4本柱？ | + |
| S K 1 (土塁 1) | S -24区 | 長225.2m、幅道1.5m、隅円形 | + |
| S K 2 (土塁 2) | S -24区 | 全容12.4m | + |
| S K 3 (土塁 3) | S -24区 | 。 | + |
| S K 4 (土塁 4) | R -24区 | 。 | + |
| S K 5 (土塁 5) | R - S -24区 | 残長9m、幅40.75m、長方形 | + |
| S K 6 (土塁 6) | S -24区 | -220.55m、方形 | H |
| S K 7 (土塁 7) | S -24 -25区 | 長径2m、短径1.2m、隅円形 | + |
| S K 8 (土塁 8) | S -25区 | 直径5m、円形 | + |
| S K 9 (土塁 9) | S -24区 | 長径55m、短径4m、橢円形 | + |
| S K 10 (土塁 10) | R -24区 | 全長5m、幅1.8m、深狀況 | + |
| P 1 (住穴 1) | P -24区 | 直径6.3m、深5.2m | + |
| 中 | 世 | | |
| S B 2 (埴輪 2) | L -24区 | 2間×2間 | |
| S B 3 (埴輪 3) | K - I -24区 | 1間×2間 | |
| S B 4 (埴輪 4) | I -24区 | 1間×1間、調査区外へ傾く可能性あり | |
| S D 5 (焼 5) | L - M -24区 | 幅0.5m厚0.2m焼、薄 | |
| S D 6 (焼 6) | R -25区 | 。 | |
| S D 7 (焼 7) | R - S -25区 | 。 | |
| S K 11 (土塁 11) | M -24区 | 長260.8m、幅360.4m、隅円形 | + |
| S K 12 (土塁 12) | M -24区 | 。 | + |
| S K 13 (土塁 13) | M -24区 | 。 | + |

第21図 第2次調査遺構全体図 (S = 1 : 500)



第2枚 第2次調査遺構一覧表

| + | 15 | + | 16 | + | 17 | + | 18 | + | 19 | + | 20 | + | 21 | + | 22 | + | 23 | + | 24 | + | 25 | + | + |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|---|
| + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + |
| 0 | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + |
| R | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + | + |



第22図 第2次調査遺構部分図 (S = 1 : 200)

2 第2次調査の記録

主な遺構として古墳時代の住居跡3、土壙10、中世の建物跡3、溝3、土壙3などがある。

(1) 古墳時代の遺構・遺物

住居5（第23・25図）

S-24LK、一辺3.4m程の方形住居跡である。ほぼ中央に確認調査時のトレンチがあり今回東西両端部分を検出した。20cm程の壁に沿った壁溝が巡り主柱は4本（P-1～4）である。

P-2～3間の距離は、1.9mを測る。内部及び床面から須恵器、土師器片が出土している。

須恵器は（第25図1）は復元口径11.4cm、器高4.1cmを測る杯身で、立ち上がりが器高の半

分近くあり口縁端部は平である。底部半分に回転ヘラ削りを施している。
2～4は土師器の甕で4は口径17.4cm、胴部外面にハケ目、内面にヘラ削りを施し、5は小形の土器で口形8.6cm、器高5.4cm、内面に指頭圧痕が残り、6は高杯の脚部で底径9.4cmを測り外面にハケ痕、内面にしづり痕がみられる。

住居6（第24・25図）

S-24区、一辺3.3m

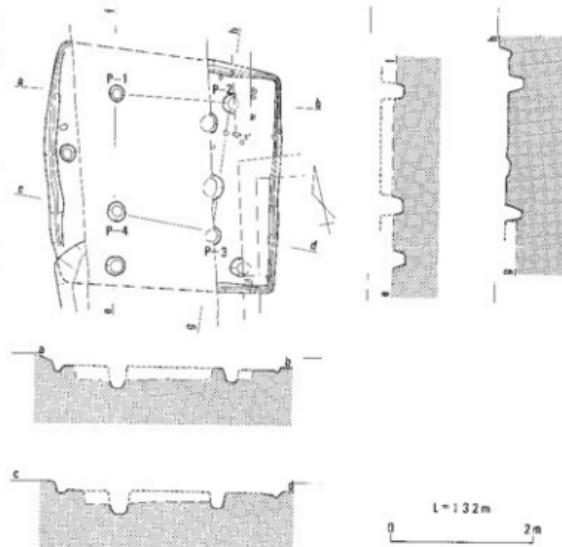
程の方形住居跡である。

これも大部分が確認調査時のトレンチの中にあ
る。住居5と上塙1に切
られている。壁に沿った
20cm程の溝が巡り、支柱
は4本（P-1～4）で
ある。P-2～3間の距離
は1.6mを測る。内部
から土師器（第25図7・
8）が出土している。

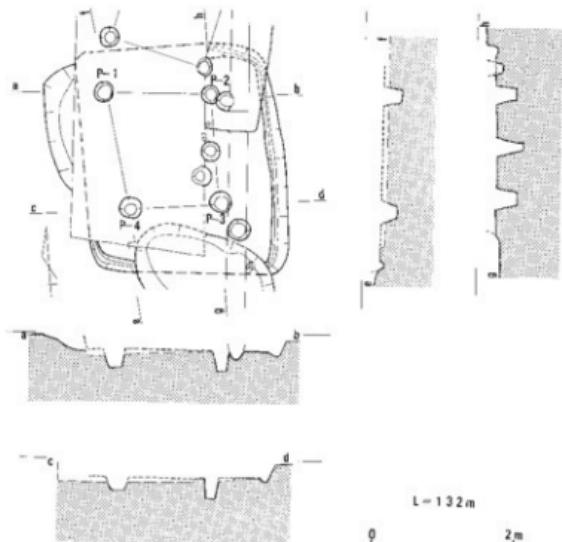
7は土師器甕で口径
18cm外面にやや粗いハケ
痕がみられ、8は甕で破
片からの復元である。口
径20.6cm、復元器高27.1

cm、外面にあらいハケ

内面七半にハケ、下半にヘラ削りを施している。底部は欠損しているが円孔が数個確認できる。



第23図 住居5 平・断面図 (S = 1 : 80)



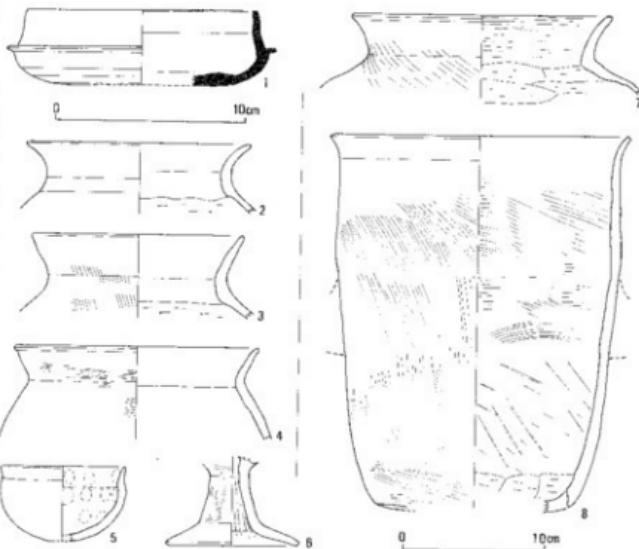
第24図 住居6 平・断面図 (S = 1 : 80)

しかし全体構造
は不明である。

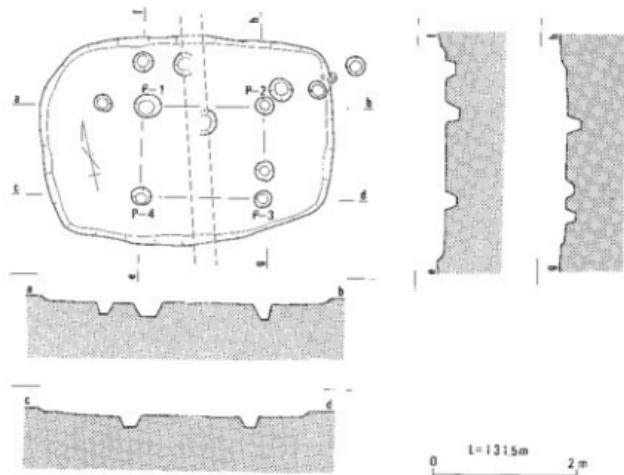
住居 7 (第26図)

R - 16・17区
に単独で存在す
る。南北3m東
西4.2m程の隅
丸長方形を呈す
る住居跡で壁に
沿った溝をもた
ない。主柱は明
確でないが4本
(P - 1~4)と
考えられるが、
深さは20cm程で
浅いものである。

P - 1~2間の
距離は1.7mを
測る。周辺には
洪水のための砂
礫がかなり堆積
しており削平を
かなり受けてい
るものと思われ
る。東壁内部よ
り土師器片が
出土している。土
師器は細片のた
め図示していな
いが甕の破片で
ある。



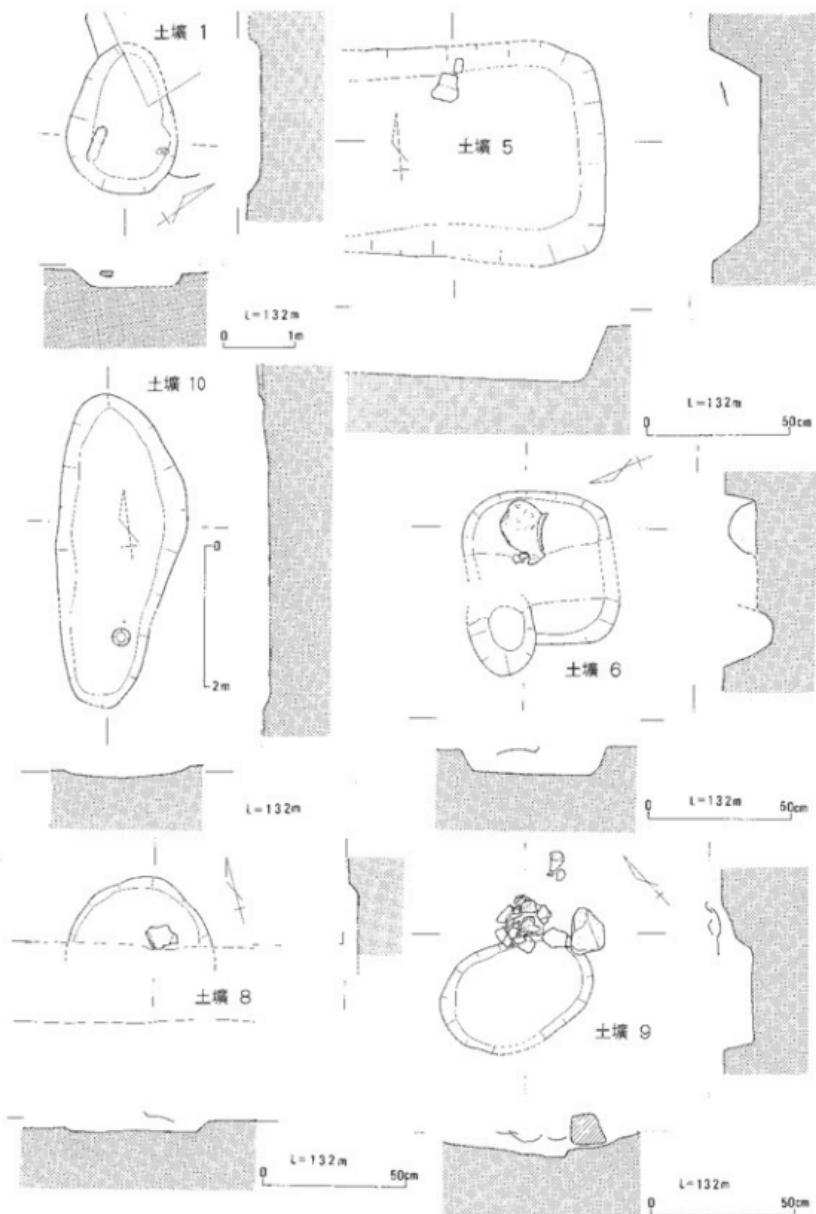
第25図 住居5・6出土遺物 (1~S = 1:3、2~8~S = 1:4)



第26図 住居7 平・断面図 (S = 1:80)

土壤 1 (第27図)

S - 24区、長径2.2m、短径1.5m、深さ25cm程の土壇で内部から土師器片と50cm程の平な長



第27図 土壌 1、5、6、8~10^{1/2}・断面図 (1~10...S=1:80、5~6~8~9...S=1:20)

石が出土している。

土壤2・3・4（第22図）

S・R-24区、いずれも確認調査のトレンチにかかっているため全容は不明である。内部から土師器片が出土している。

土壤5（第27・29図）

R・S-24区、現長90cm、幅75cm、深さ20cm程の長方形土壤と考えられ、内部から土師器片（第29図1）が出土している。1は瓶ないしは鉢の口縁部で復元口径23.8cmを測る。

土壤6（第27・29図）

R・S-24区、一辺55cm、深さ11cm程の方形土壤で内部から土師器片（第29図2）が出土している。2は壺で口径16cm、現高13.5cm、肩部外面にハケ、口縁部内面にハケ、胴部内面にヘラ削りを施している。

土壤7（第22図）

S-24・25区、長径2m、短径1.2m、深さ10cm程の楕円形土壤で内部から土師器片が出土している。

土壤8（第27・29図）

S-25区、直径50cm、深さ5cm程の浅い円形土壤で内部から土師器片（第29図3）が出土している。3は壺で口径11.6cm、外側はかなり摩滅しているが内側はヘラ削りを施している。

土壤9（第27・29図）

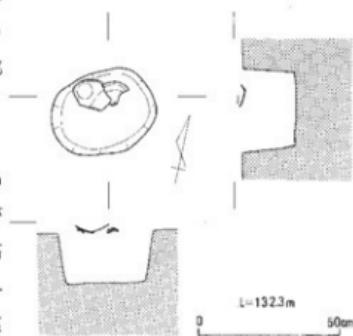
S-24区、直径55cm、短径40cm、深さ10cm程の楕円形土壤で内部から焼土、炭が出土し上面からは土師器片（第29図4）や石が出土している。火を使用した施設と考えられる。4は小形の壺で口径12.2cm、器高17.5cmを測り、外側にハケ、内側にヘラ削りを施している。

土壤10（第27・29図）

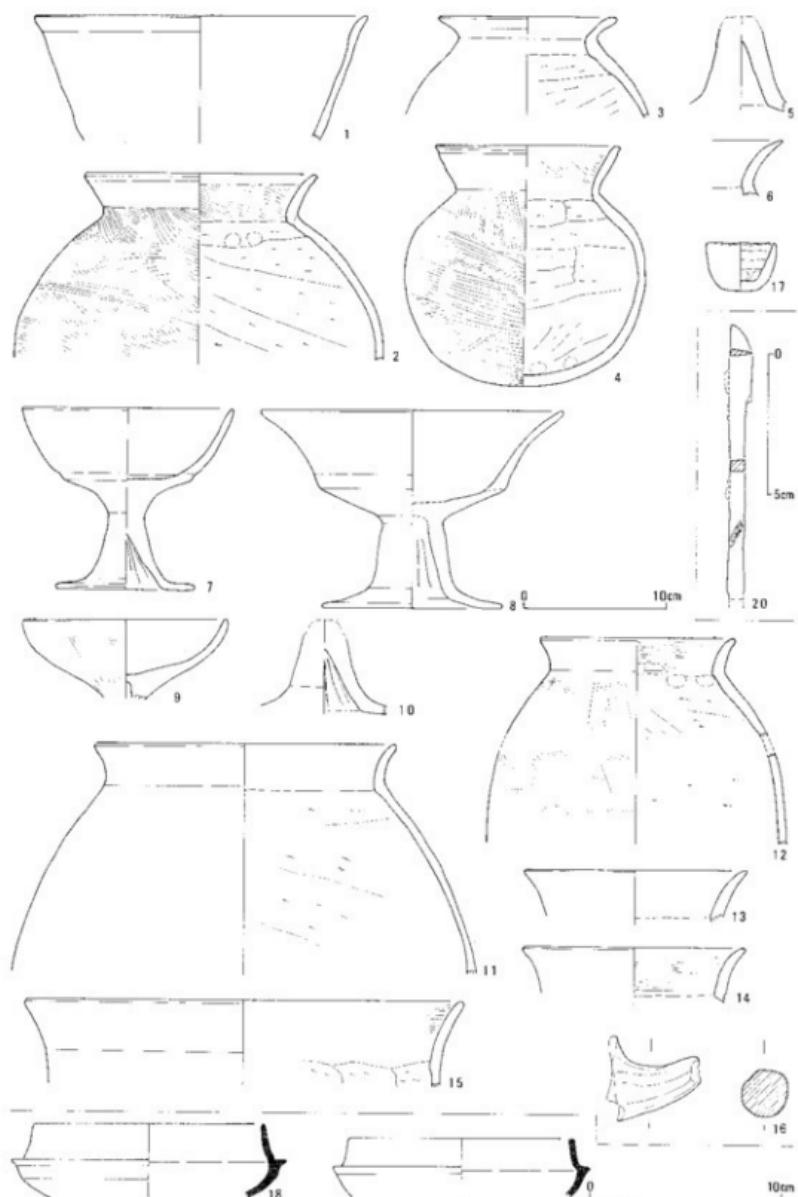
R-24区、全長4.5m、幅1.8m、深さ15cm程の溝状を呈する遺構で内部から土師器片（第29図5・6）が出土している。5は高杯の脚部、6は壺の口縁部である。

柱穴1（第28・29図）

P-24区、に単独で存在する。直徑30cm、深さ20cm程の柱穴で内部上層から土師器高杯（第29図7）が出土している。7は口径14.6cm、底径5cm、器高13.1cmを測りやや矮をもつ椀状の杯部とくの字に外反し接地面の広い脚部である。脚部内側にしづら痕がみられる。



第28図 柱穴1平・断面図 (S = 1:20)



第29図 土壇及び遺構に伴わない出土遺物 (1-17... S=1:4, 18-19... S=1:3, 20... S=1:2)

遺構に伴わない遺物 (第29図 8~20)

8以外は住居跡 5・6付近から出土している。8~10は高杯で杯部が屈曲して外反するもの (8)、椀状のもの (9) がある。8は口径21.6cm、底径10.6cm、器高15cmを測る。11~14は壺で11は口径21.4cm、15は瓶で復元口径31cmを測る。16は瓶の把手で断面はほぼ球形で角状を呈している。18・19は須恵器杯身で18は復元口径12cmで口縁端部は丸くなっている。20は片刃の鉄鎌で現長9.7m、幅5mm、刃部長3cm、幅8mm、厚さ2mmを測り、茎部に木質が残り先端は欠損している。

(2) 中世の遺構・遺物

建物 2 (第30図)

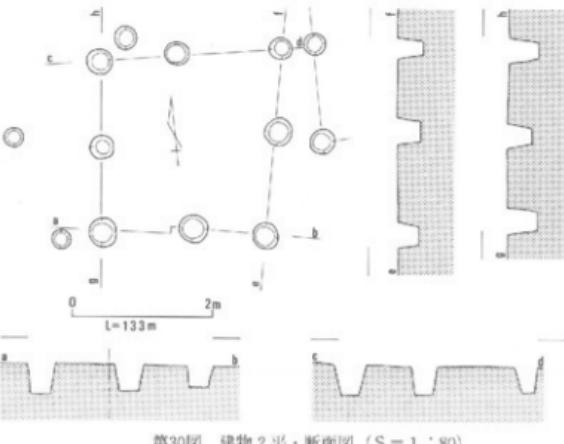
L-24区、建物 3 と接近している。梁間 2 間、桁行 2 間で中央には柱穴は見られない。柱穴の心々間距離は a - b 間が 1.2、1.3m、c - d 間が 1.1、1.5m、e - f 間が 1.3、1.5m、g - h 間が 1.2、1.3m を測る。ほぼ南北方向を向いた建物である。

建物 3 (第31図)

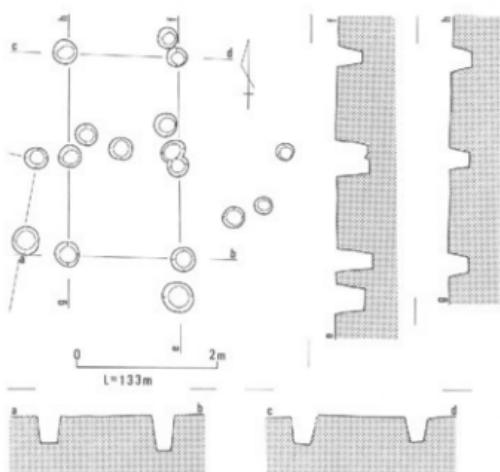
K・L-24区、梁間 1 間、桁行 2 間の建物跡である。各柱の心々間距離は a - b 間が 1.65m、c - d 間が 1.6m、e - f 間が 1.4、1.5m、g - h 間が 1.4、1.5m を測る。ほぼ南北方向を向いた建物である。

建物 4 (第32図)

I-24区、現状では梁間 1 間、桁行 1 間の建物跡



第30図 建物 2 平・断面図 (S = 1 : 80)



第31図 建物 3 平・断面図 (S = 1 : 80)

であるが南西隅の柱穴は調査区外である。さらに調査区外に続く長い建物になる可能性がある。各柱の心々間距離は c - d 間が 1.8m、e - f 間 2.9m を測る。

溝 5・6・7 (第21・22図)

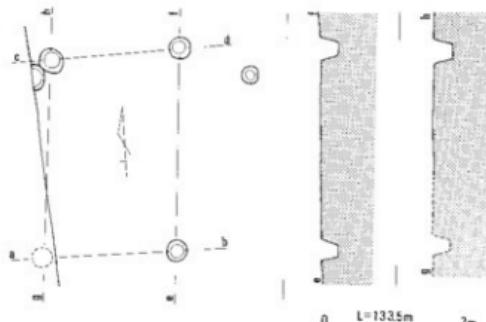
いずれも幅 0.5m 程の浅い小溝である。

土壌 11・12・13 (第21図)

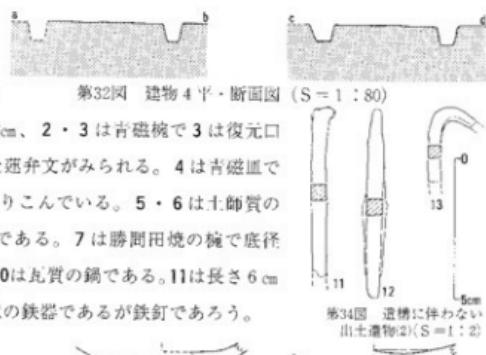
M-24 区、いずれも長径 0.8m、短径 0.4m、深さ 0.2m 程の楕円形を呈する。

遺構に伴わない遺物 (第33・34図)

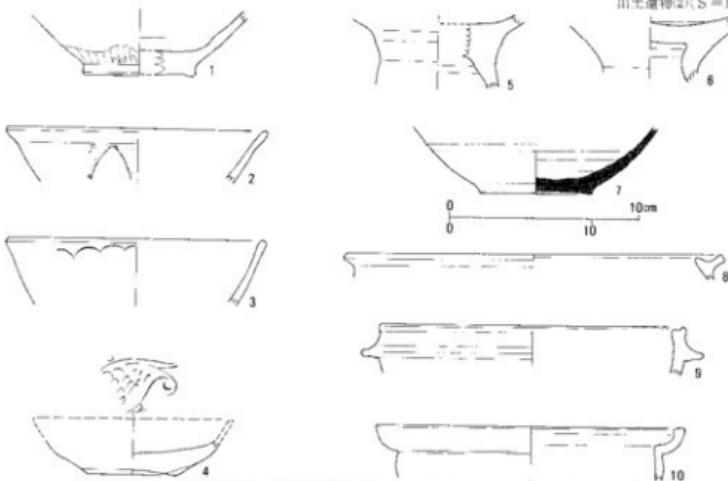
1 は白磁碗の高台部分で底径 5.2cm、2・3 は青磁碗で 3 は復元口徑 13.5cm を測り外面にやや退化した蓮弁文がみられる。4 は青磁盤で底径 3.6cm、内面には魚の文様を掘りこんでいる。5・6 は土師質の台付きの遺物だが上部構造は不明である。7 は勝間田焼の碗で底径 6 cm を測る。8・9 は瓦質の羽釜、10 は瓦質の鍋である。11 は長さ 6 cm の鉄釘で先端は欠損、12・13 は棒状の鐵器であるが鉄釘であろう。



第32図 遺物 4 平・断面図 (S=1:80)



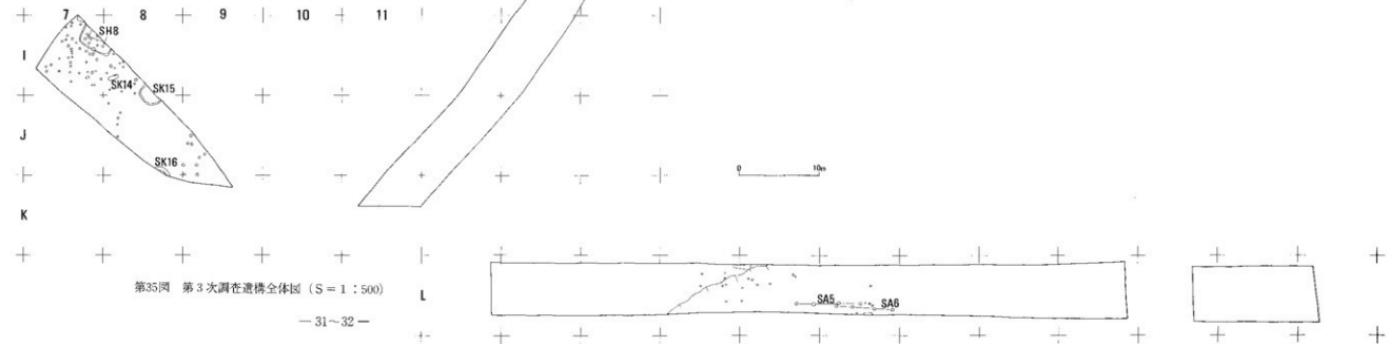
第34図 遺構に伴わない
出土遺物 2 (S=1:2)



第33図 遺構に伴わない出土遺物(1) (1~7 S=1:3, 8~10 S=1:4)

| 古墳時代 | 位置 | 備考 |
|----------------|-------------------|---------------------|
| S H 8 (住居 8) | I - 7 - 8 区 | 一边4.5m、方形、一部調査区外 |
| S K 14 (土塁 14) | I - 8 区 | 長径1.3m、短径0.6m、指円形 |
| 中世 | | |
| S B 5 (建物 5) | B - C - 16 区 | 1間×1間、一部調査区外 |
| S A 1 (柱穴 1) | A - 12 - 13 区 | 3面、柱間は1.5-2.0m |
| S A 2 (柱列 2) | B - 17 - 18 区 | 3箇、柱間は1.8-2.0m |
| S A 3 (柱列 3) | F - G - 16 区 | 3箇、柱間は1.2-1.6m |
| S A 4 (柱列 4) | G - 16 - 17 区 | 5箇、柱間は1.5-1.6m |
| S A 5 (柱列 5) | L - 16 - 17 区 | 3箇、柱間は2.3-3.2m |
| S A 6 (柱列 6) | L - 17 区 | 3箇、柱間は2.2-2.7m |
| S D 8 (唐 8) | A - B - 16 区 | 現長4.5m、幅1.5m、深さ0.2m |
| S D 9 (唐 9) | A - B - 16 - 17 区 | 最大底5.2m、幅5.0-4m、石積み |
| S D 10 (唐 10) | F - G - 18 - 19 区 | 幅0.4m、深さ0.12m程度の浅い溝 |
| S K 15 (土塁 15) | I - J - 8 区 | 直径3m、円形?、一部調査区外 |
| S K 16 (土塁 16) | J - K - 8 区 | 現長2.2m、幅0.7m、一部調査区外 |
| S K 17 (土塁 17) | A - 16 区 | 段段0.95m、幅60.5m、土壠墓? |
| S K 18 (柱跡 18) | A - 16 区 | 長径1-1.2m、短径0.5-0.6m |
| S K 19 (土壤 19) | A - B - 16 区 | * |
| S K 20 (土壤 20) | B - 18 区 | 直徑0.7m、指円形、一部調査区外 |
| S K 21 (土塁 21) | A - 19 区 | 全長1.5m、幅0.85m、伙士施設? |
| S K 22 (柱跡 22) | F - 19 区 | 直徑0.7m、円形 |
| S K 23 (土壤 23) | F - G - 19 - 20 区 | 全長1.2m、幅0.65m、長方形 |
| P 2 (柱穴 2) | B - 16 区 | 直徑0.45m、深さ0.14m |
| P 3 (柱穴 3) | B - 16 区 | 直徑0.45m、深さ0.1m |
| P 4 (柱穴 4) | B - 16 区 | 直徑0.45m、深さ0.08m |
| P 5 (柱穴 5) | B - 16 区 | 直徑0.55m、深さ0.17m |
| P 6 (柱穴 6) | A - 19 区 | 直徑0.7m、深さ0.36m |
| P 7 (柱穴 7) | G - 19 区 | 直徑0.3m、深さ0.13m |

第3表 第3次調査遺構一覧表



3 第3次調査の記録

主な遺構として古墳時代の住居跡1、土壙1、中世の建物跡1、柵列6、溝3などがある。

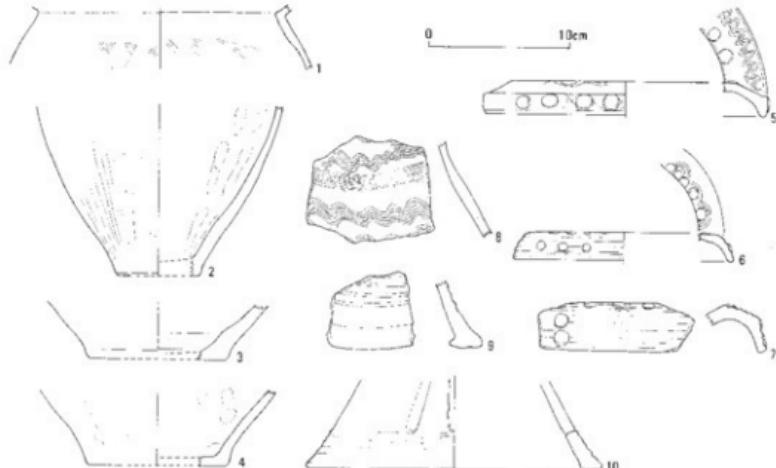
(1) 弥生時代の遺構 (第36図)

弥生時代の遺構は検出していない。土器はいずれもG-14区付近の包含層からの出土である。1・2は壺で1の内外面にはハケ2の外面にはハラ磨き痕が見られる。3・4は壺の底部、5・6は壺の下に垂れ下がる口縁部で外面に貼り付け円形浮文、波状文、凹線文などで装飾している。8も壺の副部でハケを施した上に直線文、波状文などで装飾している。7は器台の下に垂れ下がる口縁部で外面に貼り付け円形浮文を施している。9・10は器台の脚部で10には方形の透し痕が見られる。

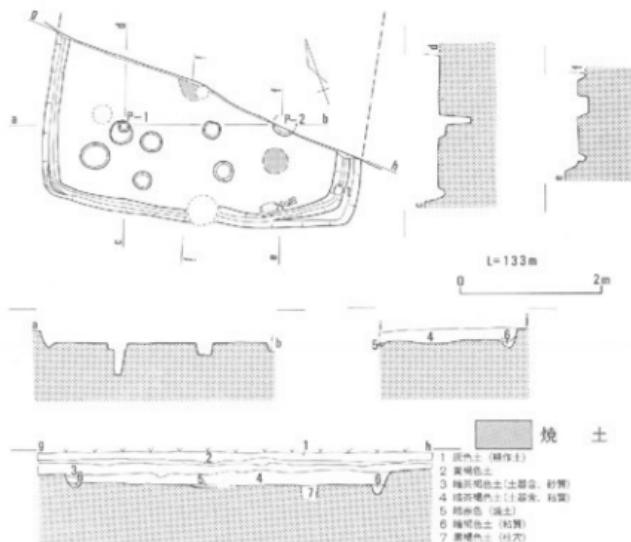
(2) 古墳時代の遺構・遺物

住居8 (第37図)

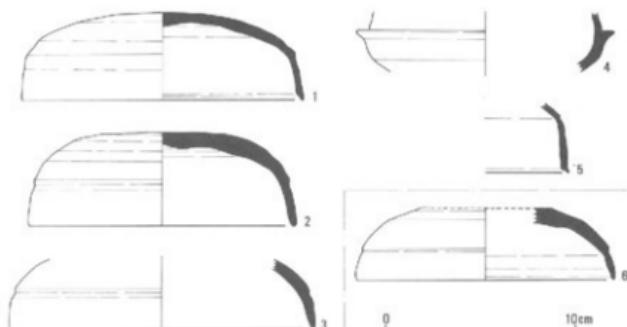
I-7・8区、一辺4.5m程の方形住居跡で半分ほどが調査区外である。壁に沿った幅20cm程の豊溝が巡り主柱は2本(P-1~2)検出している。中央部とP-2南側に焼土面がある。埋土及び床面から須恵器、土師器片が出土している。土師器は細片であるため須恵器のみ図示した。第38図1~3・5は杯蓋、4は杯身である。1は南側コーナー付近の豊溝内からの出土ではほぼ完形である。口径14.8cm、器高4.8cmを測る。天井部との境に若干の棱を残すが全体に摩滅が著しいため天井部の調整は不明である。埋土内から小指大の鉄滓が1点出土している。これについては分析を行っていないが、表面観察から鍛冶滓の可能性が大きい。



第36図 遺構に作わない出土遺物 (S=1:4)



第37図 住居8平・断面図 ($S = 1 : 80$)



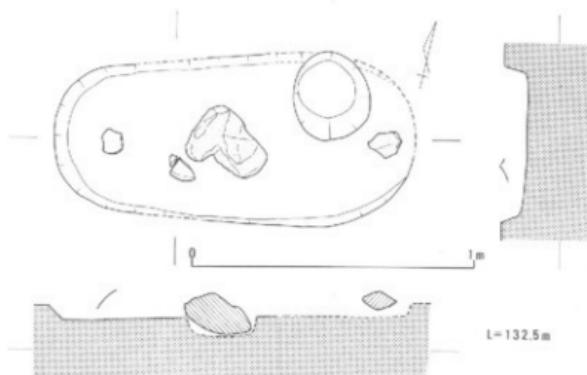
第38図 住居8、土坑14出土遺物 ($S = 1 : 3$)

土壤14 (第39図)

T-8区、長径1.3m、短径0.6mの梢円形を呈する。内部から自然石と須恵器、土師器片が出土している。須恵器（第38図6）は杯蓋で口径13.4cm、器高3.8cmを測る。

遺構に伴わない遺物 (第40図)

1~4は土師器壺、5・6は高杯である。1は口径13.8cm、現高17.5cm、3・4は同一個体と考えられ外側にハケ、内面にヘラ削りを施している。5の高杯は杯部が屈曲して外反し脚部

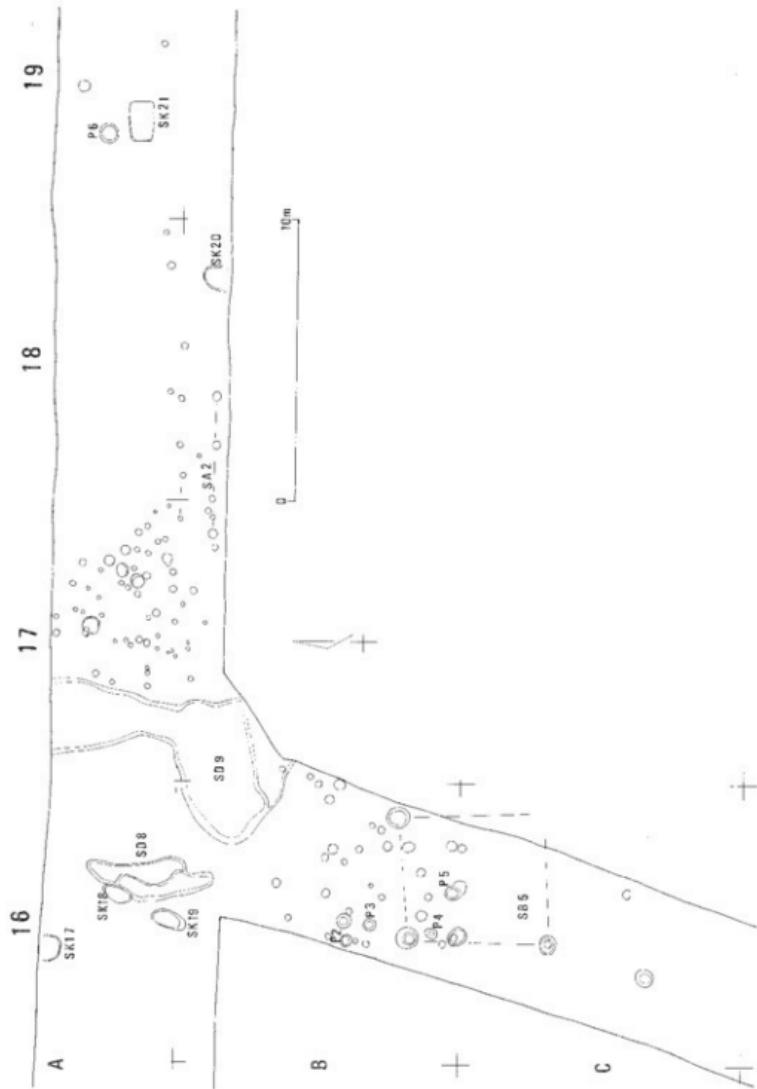


第39図 土壌14平・断面図 ($S = 1 : 20$)



第40図 遺構に伴わぬ出土遺物 ($S = 1 : 4$)

の接地面が広い形態である。また、L-15・16区に自然の落ち込みがある。この落ち込みは深さ0.4m程で調査区外へ続いている。埋土から1・6の土師器が出土する事から古墳時代には埋没しているものと考えられる。同一のものが第2次調査でも確認されている(Q・R-15・16・17区)事からこの辺り一帯をえぐる形で自然の落ち込み(沼などの縁辺部)が存在していたものと考えられる。



第41図 第3次調査造構部分図 ($S = 1 : 200$)

(3) 中世の遺構・遺物

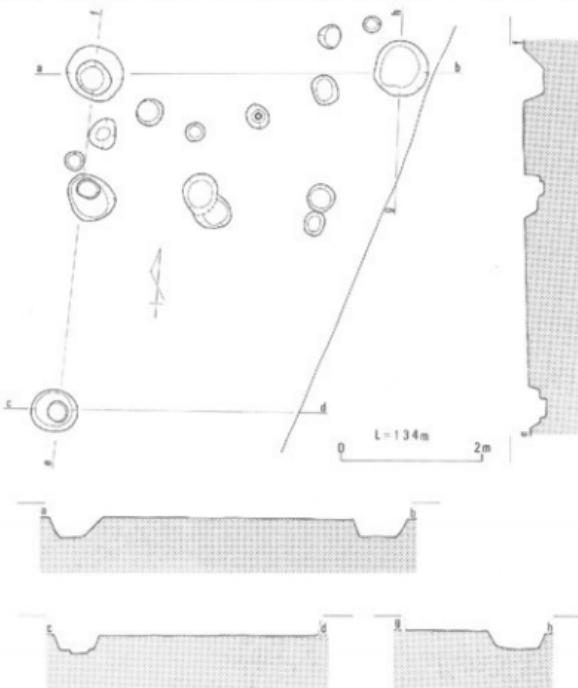
建物5 (第42図)

B・C-16区、現状では桁行1間、梁間1間で南東隅の柱穴は検出していないが、北側に庇などが付く建物と考えられ、さらに調査区外に続く可能性もある。各柱の心々間の距離はa-b間が4.5m、e-f間が3.2、1.6mを測る。e-f間の柱穴はすべて2段掘りの形状である。

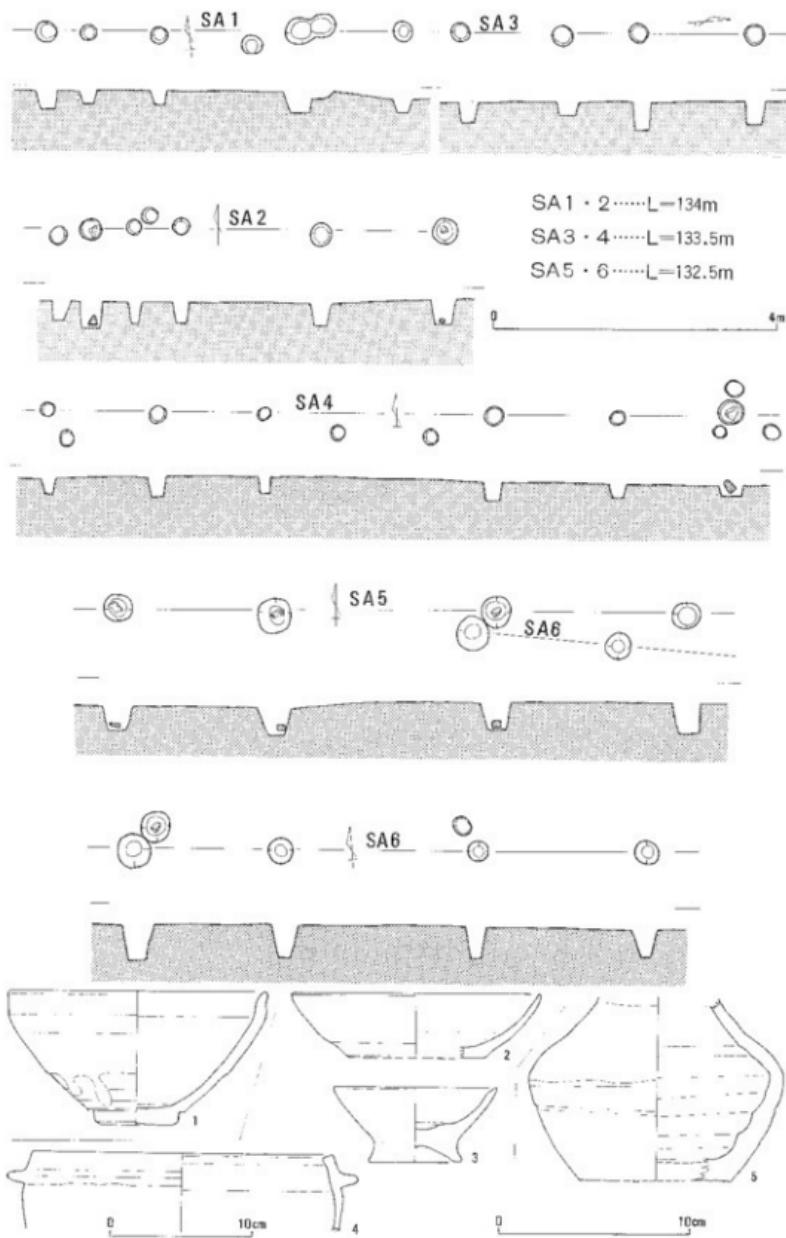
構列1～6 (第43図)

構列1はA-12・13区、2はB-17・18区、3はF・G-16区、4はG-16・17区、5・6はL-16・17区に位置する。構列1～3・5・6はいずれも3間、構列4は5間を数える。各柱の心々間距離は構列1が1.5～2.0m、2が1.8～2.0m、3が1.2～1.6m、4が1.5～1.6m、5が2.3～3.2m、6が2.2～2.7mを測る。構列5は東端以外の柱穴から石が出土しており柱の支え石の可能性がある。構列3は南北方向を向きその他はほぼ東西方向である。

第43図1は構列1の東から2番目の柱穴より出土した天目碗で口径13.6cm、底径4.3cm、器高7.3cmを測り、口縁端部は垂直に立ち上がり先端がやや外反している。2～4は構列4の東



第42図 建物5 平・断面図 (S = 1 : 80)



第43図 棚列1~6 平・断面図 ($S=1:80$) 及び出土遺物 (1~3・5 $S=1:3$, 4 $S=1:4$)

から3番目の柱穴から一括して出土している。2は土師質杯、3は土師質の台付小皿で2は口径13.2cm、底径7.2cm、器高3.4cm、3は口径8.4cm、底径4.6cm、器高4.1cm、4は瓦質の羽釜で復元口径20.2cmを測る。5は横列6の西から2番目の柱穴から破片となって出土した。精査をしたが口縁部はみつかっていない。底径7.8cm、残存高9.8cm、外面上半に自然釉が付着している。備前焼ないしは丹波焼の小壺と考えられる。

溝8（第44図）

A・B-16区、削平を受けているため現状で全長4.5m、幅1.5m深さ20cmを測る。ほぼ南北に流れる溝で2段階の形状を呈しており、おそらく溝の底の部分のみが残っているものと考えられる。土器細片が出土している。

溝9（第45図）

A・B-16・17区、流路は北から南に向かい石が積まれている所で一端西側にオーバーフローさせ、方向を東南に変えている。北側幅2.7m、深さ18cm、南側幅（オーバーフロー部分）5.2m、深さ40cmを測る。また石はほぼ同一レベルで平面的にコーナーが垂直になるように並べられている。この石の隙間から土器片（第45図1）が出土している。また埋土からもかなりの土器細片が出土している。図示した1は大壺の底部と考えられ復元底径43cmを測る。内外面及び底部はハケ状工具でなでている。

溝10（第35図）

F・G-18・19区、北西から南東へ流れる小溝である。幅40cm、深さ12cmを測る。埋土のはとんどが小砾や砂である。

土壤15（第46図）

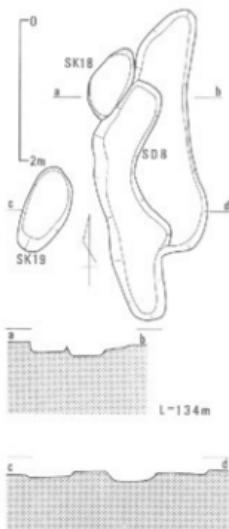
I・J-8区、調査区外にかかり全容は不明である。直径3m程の円形を呈する土壤と考えられ、深さは15cmと浅い。埋土から少量の土器片が出土している。

土壤16（第47図）

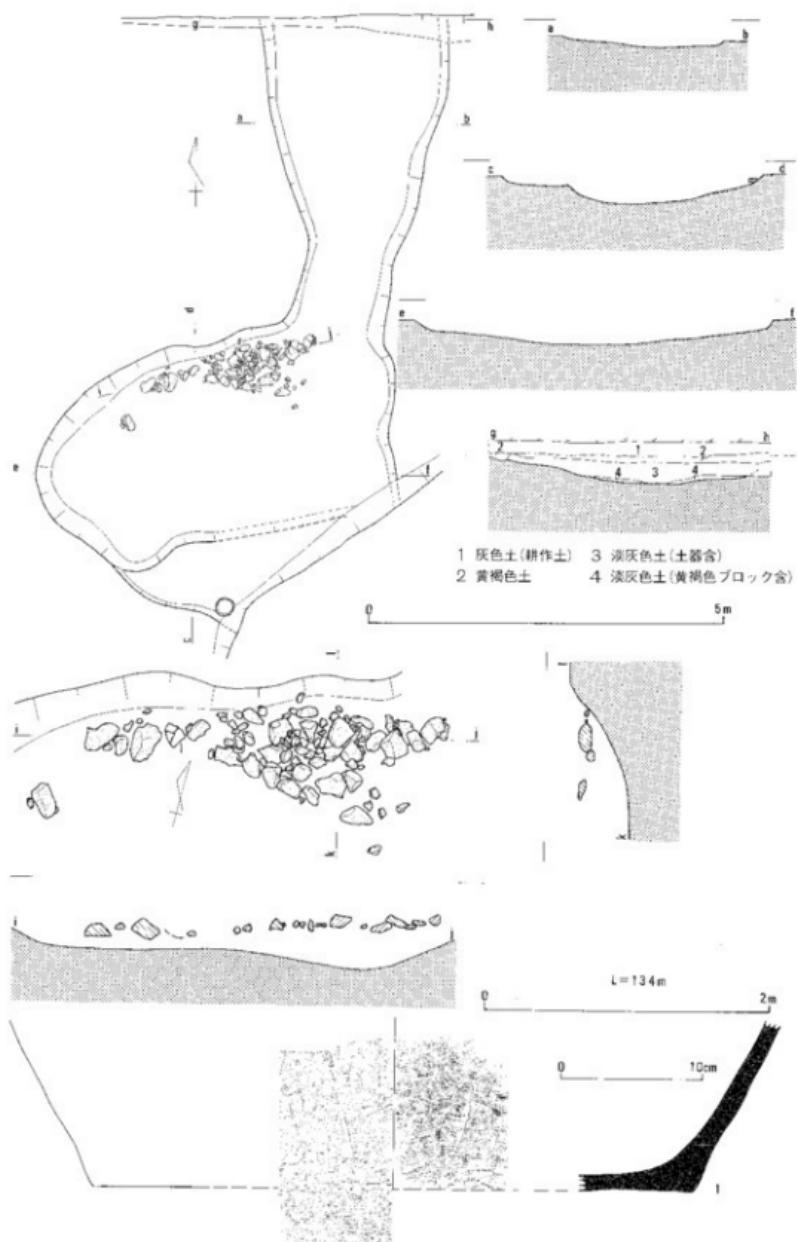
J-8区、現長2.2m、幅70cm、深さ42cmを測りかなり深い土壤であるが調査区外にかかるため全容は不明である。埋土から礫などに混じって土器片が出土している。

土壤17（第48図）

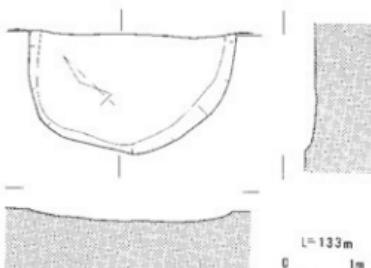
A-16区、一部調査区外にかかる。現長95cm、幅50cm、深さ5cmを測り、残りは悪いものの内部から土師質杯と鉄釘4点が出土している。出土遺物の状況から木棺墓の可能性が大きくその場合椀は棺外に置かれていたと考えられる。1は口径14.2cm、底径6.4cm、器高4.3cmを測り、



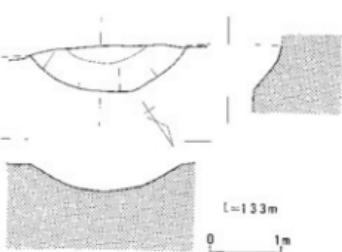
第44図 溝8、土壤18-19
平・断面図 (S=1:80)



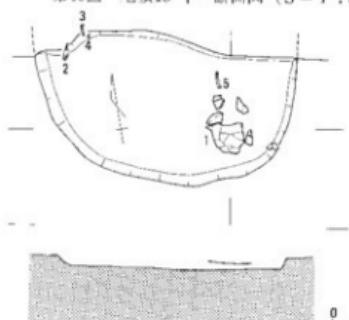
第45図 溝9平・断面図 ($S = 1 : 80$) 及び出土遺物 ($S = 1 : 4$)



第46図 土壌15 平・断面図 ($S = 1:80$)



第47図 土壌16 平・断面図 ($S = 1:80$)



第48図 上壌17 平・断面図 ($S = 1:20$) 及び出土遺物 (1… $S = 1:3$ 、2~5… $S = 1:2$)

底部はハラ切りである。2~5は鉄釘で2は長さ9cm、厚さ4mmで断面が方形を呈し、3・5には表面に木質が残っている。

土壤18・19 (第44図)

A・B-16区、溝8と切り合っており、その切り合い関係から土壤の方が新しいと考えられる。いずれも長径1~1.2m、短径0.5~0.6m、深さ8cm程の楕円形を呈する。埋土から土器片が出土している。

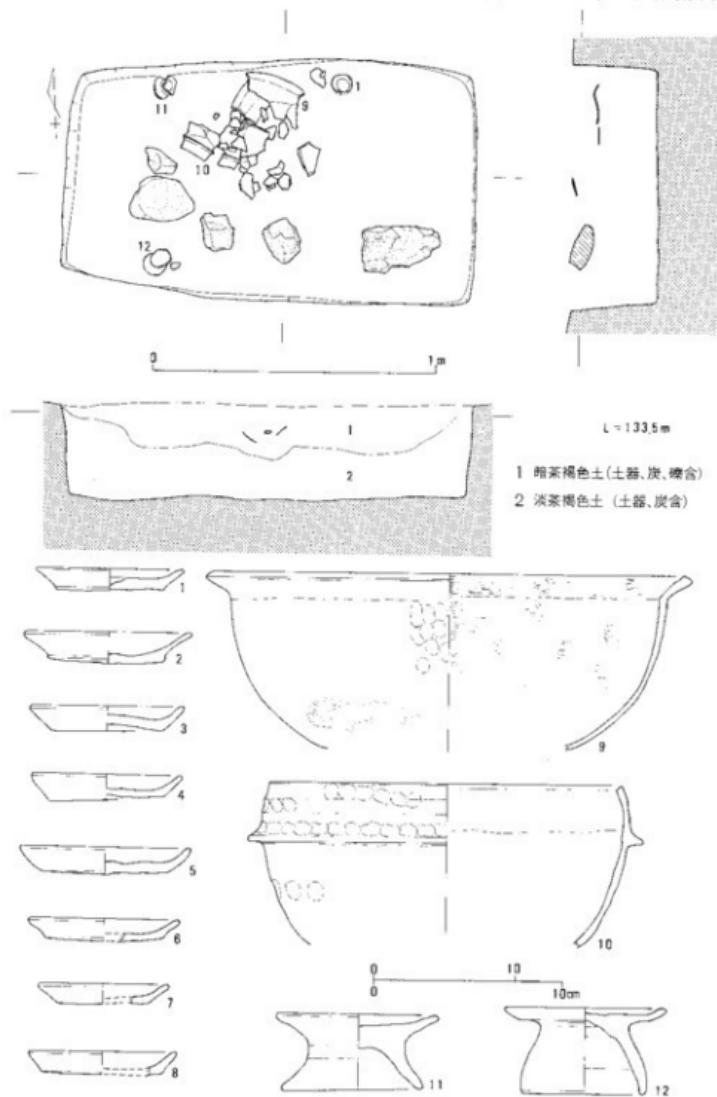
土壤20 (第41図)

B-18区、一部調査区外にかかり、現状で直径70cm、深さ24cmを測り、楕円形を呈するものと思われる。埋土から少量の炭と土器片が出土している。

土壤21 (第49図)

A-19区、長さ1.5m、幅0.85m、深さ35cm程の長方形を呈し、埋土は2層からなる。出土遺物は主に上層から出土している。埋土内には若干の炭を含んでいる。土器は石と共に中央北よりに羽釜と鍋がさらにその縁辺部に台付小皿や小皿が置かれていた。出土遺物の状況から炊事施設の可能性が考えられるがそれを利用したゴミ廃棄場や祭祠施設の可能性もある。1~8は上層質小皿、9~12は下層質台付小皿で1は口径7.6cm、底径5.6cm、器高1.2cm、11は口径

7.9cm、底径6.6cm、器高4.1cm、12は口径8.0cm、底径6.2cm、器高4.7cm、9は土師質の鍋で口径33.8cm、残存高12.4cm、外面下半と内面にハケを施し、10は瓦質の羽釜で口径25cm、残存高11.5



第49図 上塙21平・断面図 ($S=1:20$) 及び出土遺物 (1~8・11・12… $S=1:3$, 9・10… $S=1:4$)

cm、外面に指頭圧痕が残る。図示していないが勝間田焼壺片も出土している。

土壤22 (第50・52図)

F-19区、直径70cm、深さ5cm程の円形を呈し床面より長さ30cm程の平石と土師質錫片（第52図1）が出土している。

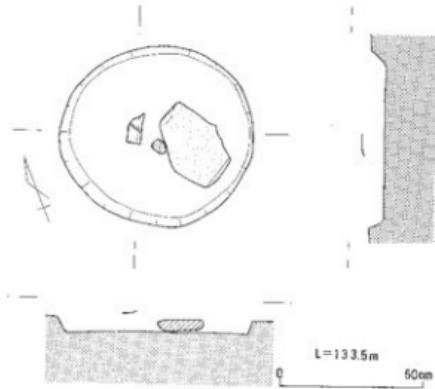
1の錫は復元して図示している。口縁がくの字に外反し端部はやや内傾している。復元口径26.8cm、残存高5.8cmを測る。内面にハケが見られる。

土壤23 (第51・52図)

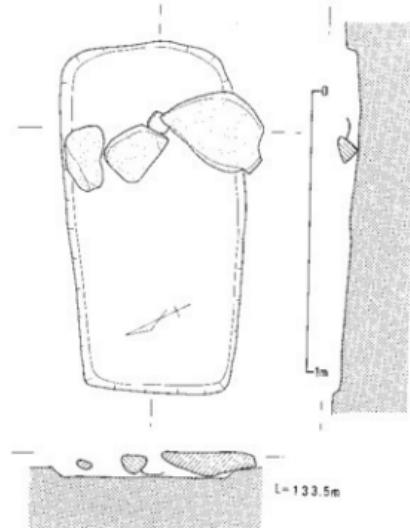
F・G-19・20区、長さ1.2m、幅65cm、深さ5cm程の浅い長方形を呈している。東側にやや大きめの石3個とその下に土師質の小皿1枚（第52図2）が置かれていた。2は口径8cm、底径5.8cm、器高2cmを測る。

柱穴2・3・4・5 (第53・54図)

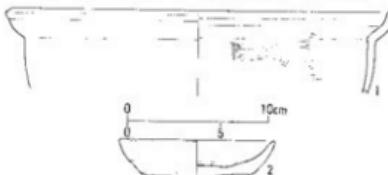
B-16区、いずれも建物5の周辺で検出している。調査区が狭いため全容ははっきりしないが、これらが建物などを構成していた柱穴であった可能性もある。柱穴2は直径45cm、深さ14cm、3は直径45cm、深さ10cm、4は直径45cm、深さ8cm、5は直径55cm、深さ17cmのはば円形を呈する。柱穴2・4は埋上から勝間田焼壺片が、柱穴3からは自然石と共に勝間田焼壺片、柱穴5は他の柱穴と切り合っており、炭などと共に土師質七器片が南辺より出土している。柱穴2の土器（第54図1・2）は勝間田焼壺の口縁部と底部で同一個体である。復元口径34.5cm、底径13.6cm、図示していないが



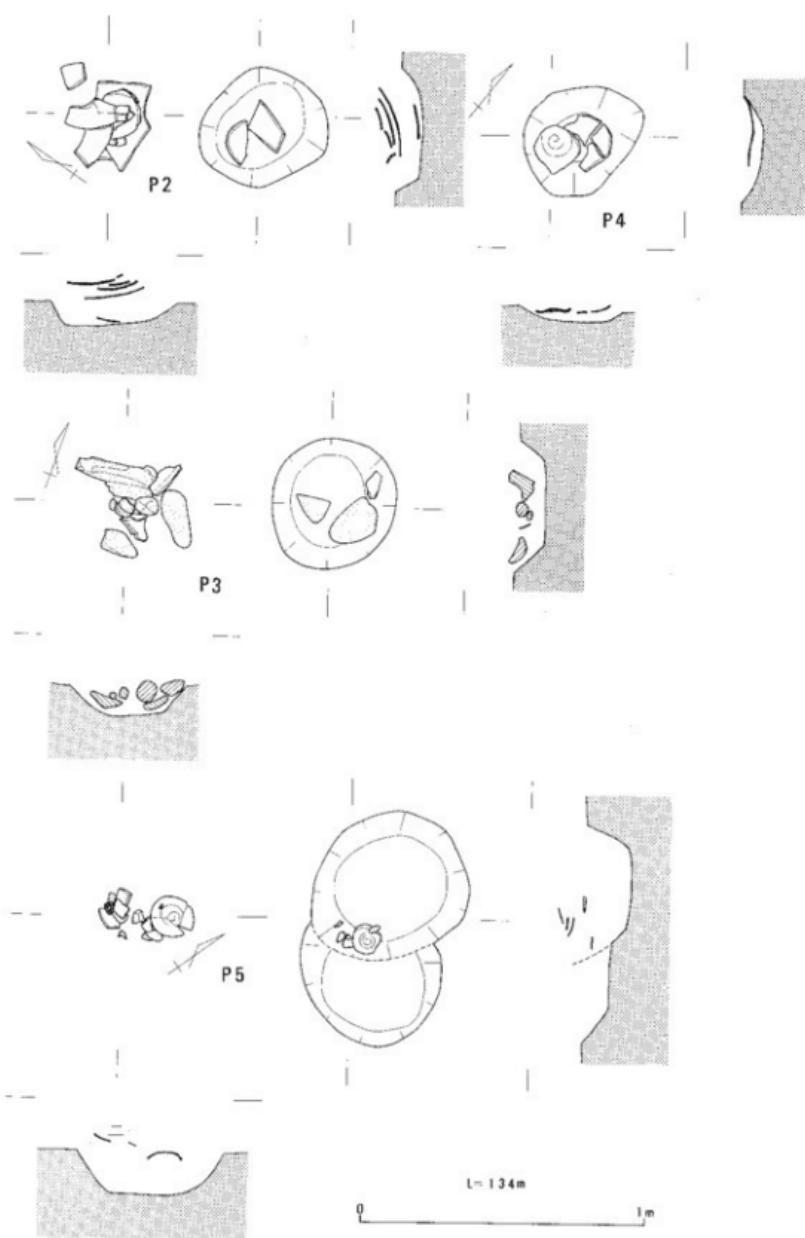
第50図 土壌22 平・断面図 (S = 1 : 20)



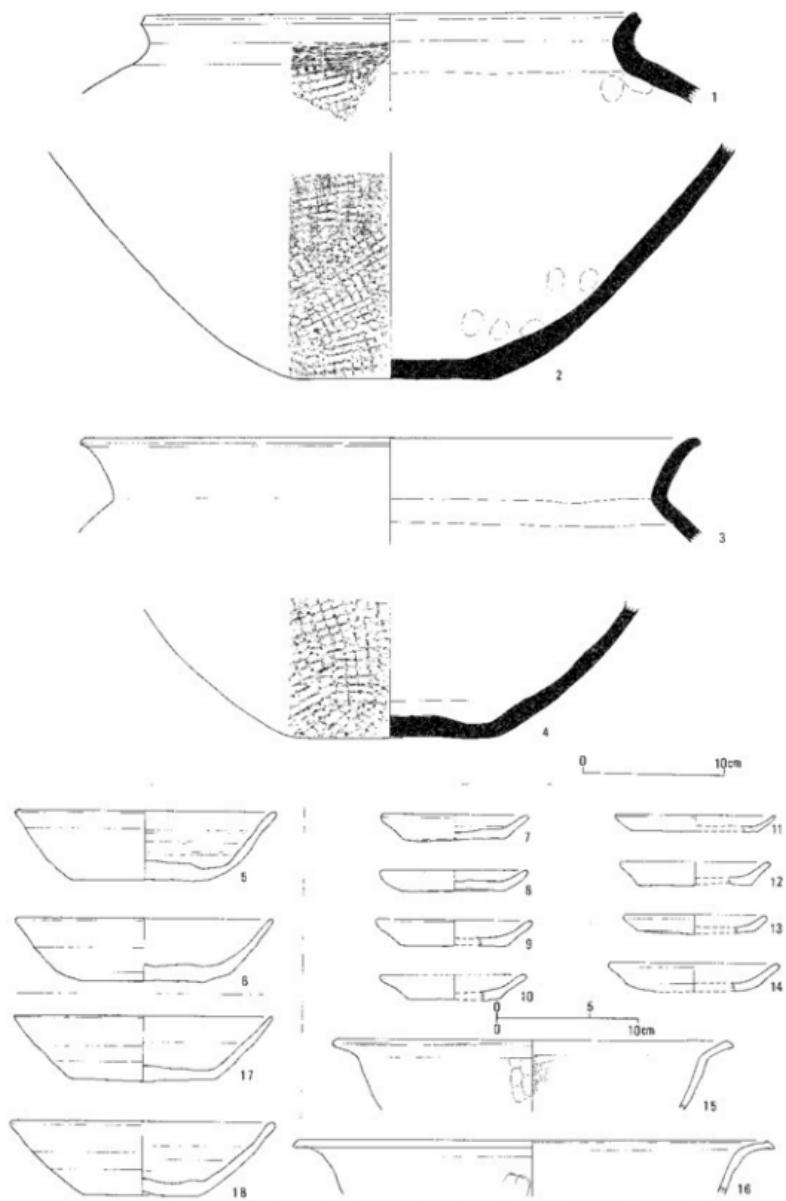
第51図 土壌23 平・断面図 (S = 1 : 20)



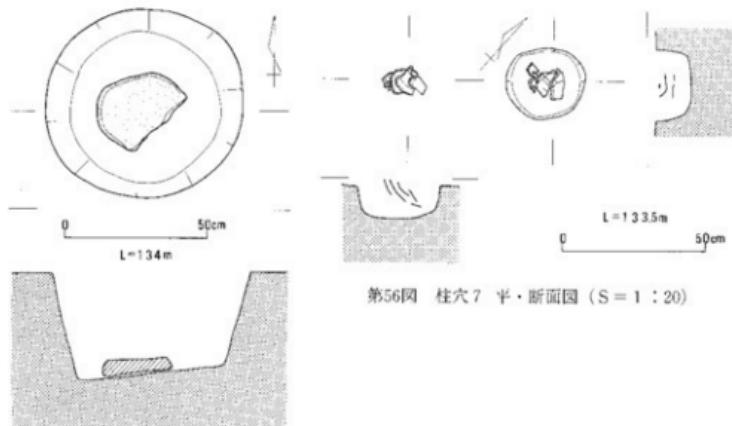
第52図 土壌22・23出土遺物(1・S = 1 : 4, 2・S = 1 : 3)



第53図 柱穴2～5 平・断面図 ($S = 1 : 20$)



第54図 柱穴2~7 出土遺物 (1~4・15・16 S=1:4, 5~14・17・18 S=1:3)



第55図 柱穴 6 平・断面図 ($S = 1 : 20$)

胴部片もかなり出土している。第53図3は柱穴3、4は柱穴4、5・6は柱穴5から出土している。3は復元口径43.2cm、4は底径14.6cmを測り胴部外面には格子目タタキが見られる。5は口径13.5cm、底径7.2cm、器高3.8cmを測り底部はヘラ切りである。

柱穴 6 (第54・55図)

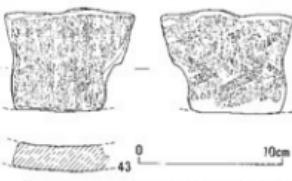
A-18区、土壤21の北側に近接しているが単独で存在する。両者の関係については明確でない。直径70cm、深さ36cm程の円形を呈し、底に長さ30cm程の平らな石が置かれていた。柱の根石であろうか。埋土から土師質の上器片など(第54図7~16)が出土している。7~14は小皿で7は口径7.4cm、底径5.3cm、器高1.4cm、15は土師質、16は瓦質の鍋で15は復元口径27.8cm、外間に指頭圧痕とススが付着し内面にはハケが施されている。

柱穴 7 (第54・56図)

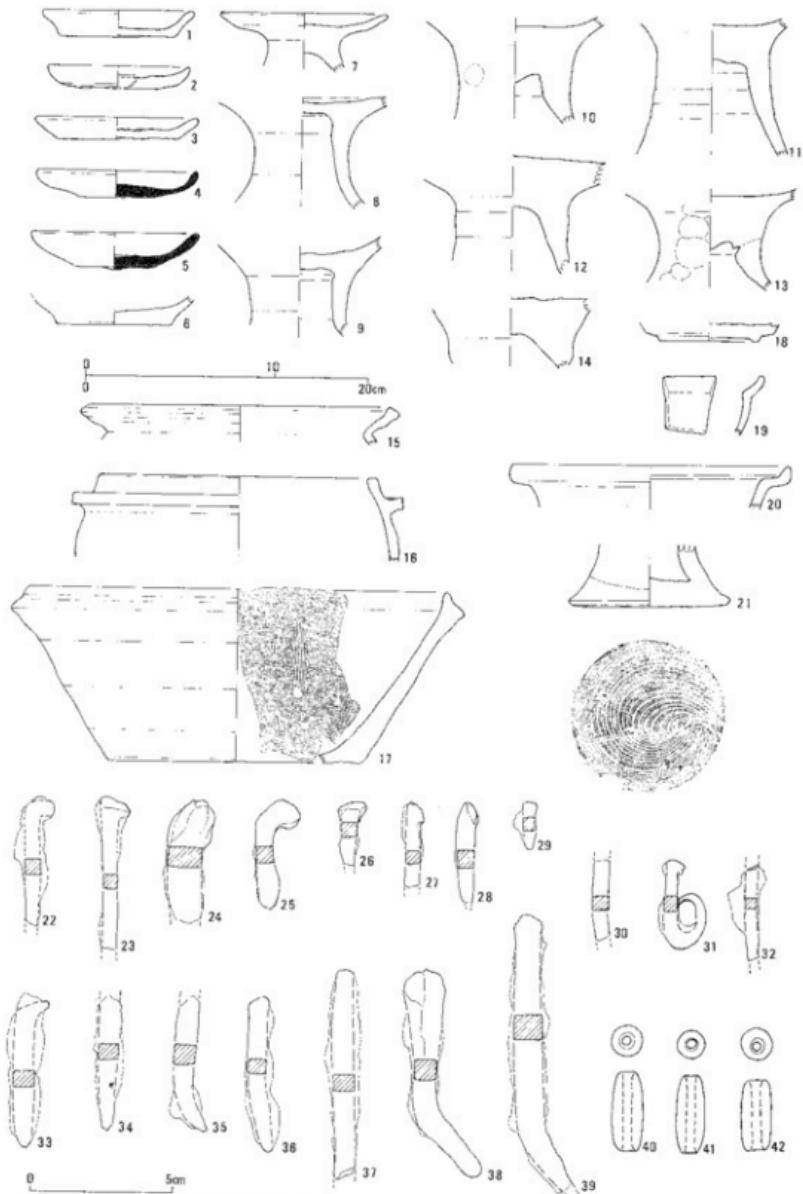
G-19区、単独で存在する。直径30cm、深さ13cm程の円形を呈し、埋土から土師質の杯片が数枚(第54図17・18)重ねて置かれていた。17は口径13.6cm、底径7.6cm、器高3.5cmを測る。

遺構に伴わない遺物 (第57・58図)

1~3は土師質小皿、4・5は勝間田焼小皿、6は土師質杯、7は台付小皿、8~14は台付の土器であるが器種は不明である。15は鍋、16は瓦質の羽釜、17は備前焼のすり鉢で卸し目は7条単位、19・20は青磁、18・21は施釉を施した陶器、21の底部は回転糸切りであり器種は不明、22~39は鉄釘、40~42は長さ2.8cmで中心に3mm程の穿孔が施された土鉤、43は勝間田焼の瓦片で、表面に格子目タタキが見られる。



第58図 遺構に伴わない出土遺物(2)
($S = 1 : 4$)



第57図 造構に伴わない出土遺物(1) (1-4・18-21)…S=1:3, 15-17…S=1:4, 22-42…S=1:2)

IV まとめ

正善庵遺跡からは縄文時代から中世までの遺物・遺構が出土している。その中に中心的な集落を構成していたのは古墳時代と中世の2時期である。以下この2時期を中心に各時代ごとにまとめを行いたい。

1 縄文時代の遺物について

今回の調査では縄文時代の遺構については検出していないものの土器の摩滅具合などから周辺地域に集落の存在が予期できる。しかし遺構が存在しない要因の一つとして、横野川の氾濫による削平の可能性も十分考慮しなければならない。出土した土器は、いずれも小片で出土地点も離れている。第7図の1・2のような爪形文を有する深鉢は、口縁がやや大きく外反する器形では、御津町・原遺跡（註1）に、さほど外反しない器形では北房町・谷尻遺跡（註2）、落合町・宮の前遺跡（註3）などに類例が見られる。破片のため全体像は不明だがほぼこれらと同時期の所産と考えると、前者は原下層式（註1）後者は谷尻式（註4）と呼ばれておりやや時期差をもつものと考えられている。尚この原下層式に関しては、不明瞭な部分が多いのでここでは後者の谷尻式の範疇で捉えておきたい。よって晩期でも古相の時期の所産と考えられる。4も口縁がやや外反する深鉢と考えられ、刻み目のある突帯で区画をしその間に線刻を施している。このように頬部と胴部の境に突帯を施している事から前述した谷尻式よりは後出するものと考えられ、ハラ書きの線刻を施す点で山陽町・南方前池遺跡（註5）に様相が似ている。これら線刻を施す事がこの時期の一バリエーションと考え、この頬部と胴部の境の突帯はこの前池式の段階ですでに成立していると言った見解もあり（註4）、断片的な資料であるもののここでは前池式の所産と考えておきたい。5は上半の沈線間に縄文を施しその他は磨り消している。その特徴から後期の所産と考えられる。

津山での縄文時代の遺構・遺物の発見は数例を数えるのみである（註6）。近年晩期については中国地方山間部でもかなりの類例が増加してきており、今回の出土例などから津山周辺地域の特に平野部で今後集落遺構が発見される可能性は十分考えられる。

2 弥生時代の遺物について

弥生時代の遺構としては、住居1軒と自然の流路（講1）を検出したのみである。その住居も明瞭な柱穴を持たず住居と断定するにはやや難がある。そのため今回は集落の多くを述べる事はできない。ただ土器の摩滅が少なくある程度まとめて出土する事から、周辺地域に集落が形成されていた事は十分考えられる。今回は出土土器から時期のみを検討してみたい。土器

片は量的にはかなりあるものの図示できるものは少ない(第9・36図参照)。その中の特徴的な壺や器台では口縁外面の凹線文上に円形浮文や波状文などで装飾している。その他の特徴などから津山市・西吉田遺跡のI式(註7)に類例が見られ、中期でも中頃の所産と考えられる。

3 古墳時代の集落について

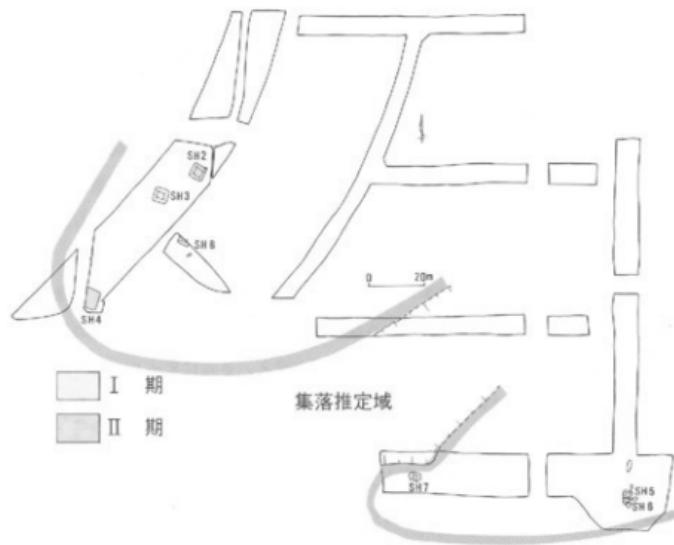
古墳時代の遺構として調査区の東・西端の部分のみから住居7軒、土塹、柱穴などを検出している。調査面積の割りに本時代の遺構の密度が少ない事は、その一つの理由として数時期にわたる川の氾濫による削平が考えられる。ここではまず出土土器を検討しそれから集落構成について可能な限り述べてみたい。

出土した須恵器はその特徴から大きく2タイプが考えられる。この両者の間には若干時間差があるもののここでは便宜上、両者を正善庵・古墳I・II期として論を進める事にする。I期は住居3の土器を指標とする(第59図)。須恵器杯蓋については良好な資料が少ない。図示した3-2を杯蓋とすると天井部との境にやや突出した稜を持ち、天井の半分程に回転ヘラ削りを施している。ただこれについては有蓋高杯の蓋の可能性もある。3-3は杯身は立ち上がりがほぼ器高の半分近くあり底部の半分程に回転ヘラ削りを施している。無蓋高杯(3-4・5)は杯部に波状文がめぐり脚部には4方向に方形透しがある。壺(3-6)は、口縁端部を上方にシャープにつまみ上げ頭部外面に2条の波状文をさらに胴部にも波状文を施している。甕としては大甕(3-7)がある。口縁端部を上方にシャープにつまみ上げ、頭部外面に波状文を施し胴部内面のタタキの當て具痕は撫で消している。また、杯身として図示している5-1は、他の器種の比較例が無いため即断はできないが、その形状からさらに一時期を画する可能性を含んでいる。土師器では甕、高杯、瓶などがある。甕には大形(3-9・11)と小形(3-17~19)がある。両者とも胴部外面にハケを内面にヘラ削りを施している。また大形は胴部が球形を呈するものが多く、口縁部の形状ではくの字に外反するもの、やや垂直に立ち上がり外反するものなど一様ではない。また小形についても同様で、口縁・胴部の形状には様々なバリエーションがある。高杯は、杯部が椀状を呈するもの(3-28)と、屈曲して外反するもの(3-31)の2種類があり、脚部についても接地面の広いもの(3-32)と狭いもの(3-28)があり、この両者の関連性については明確でない。瓶(3-36)は口縁部がやや外反し底部に向かってやや丸くなり底には円孔が穿たれている。ただその円孔の配置・数など全体像については明確でない。

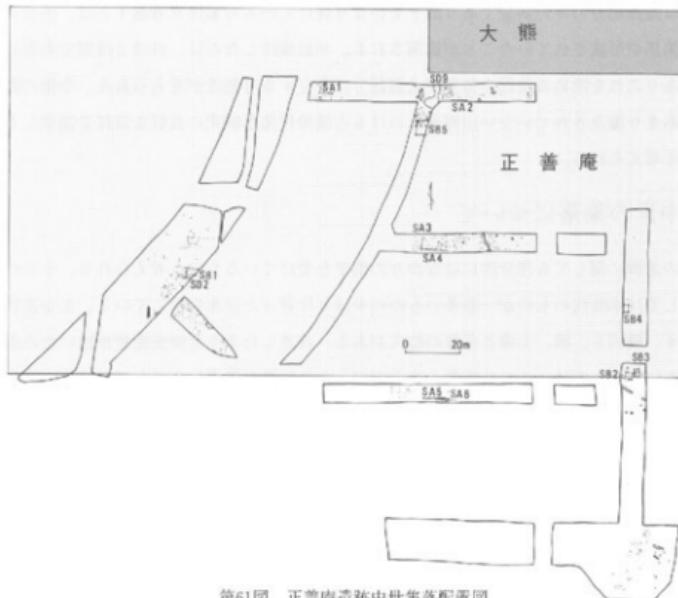
II期は住居2・4・7の土器を指標とする(第59図)。杯蓋は口径14.2cm、器高4.4cmと比較的大きく、天井部との境の稜の突出が少ない。杯身は立ち上がりがI期に比べ小さく、底部がヘラ削りのままで平になっているものがある。他の器種としては甕が出土しているのみである。甕は口縁端部を内側につまみ上げている。胴部内外面にタタキの痕跡が明瞭に残っている。ま

| 須 恵 器 | | 壺・甕 | | 高 杯 | | 杯 | | 土 器 | | 高 杯 | | 壺・甕 | | 高 杯 | | 杯 | | 須 恵 器 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|----|-----|----|-----|----|---|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|---|----|-------|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| I | II | I | II | I | II | I | II | I | II | I | II | I | II | I | II | I | II | I | II | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

第39図 古墳時代須恵器分類図



第60図 正善庵遺跡古墳時代集落配置図



第61図 正善庵遺跡中世集落配置図

た土師器として器種がわかるものは小形の壺だけである。

I期の須恵器は杯にやや後出する可能性を含むものがみられるが、全体の器種構成からいわゆる陶邑編年（註8）TK208の範疇で捉えられる。また、II期は北房町・谷尻遺跡（註2）のBタイプ、陶邑編年のTK10に併行すると考えられる。この場合両者の間の時間差として谷尻遺跡Aタイプ、陶邑編年のTK23～47がある。この時期と考えられる土器及び遺構に関しては明瞭でなく、今後この時期の遺構が周辺地域で発見される可能性が十分考えられる。以上からI期の時期はほぼ5世紀の後半にII期は6世紀の中頃にある。

I期に伴う遺構としては、住居跡3・5・6の3軒があげられ、3と5・6とは直線距離にして約190mも離れている（第60図）。周辺地域が削平されている可能性や未掘の部分を考慮に入れてもかなりの広範囲に集落が形成されていた事が伺え、さらにK～R-15～20区の範囲には自然の落ち込み状の遺構があり、その事からも集落構成が大きく2群に分けられる可能性が推測できる。

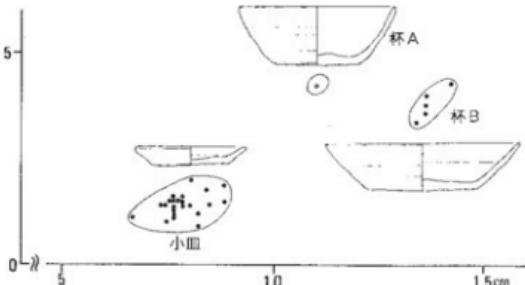
II期としては住居跡2・4・8の3軒と土塙14がある（第60図）。ほぼ調査区の西端にかたまっている。この部分は未掘が多くこの辺りに1つの単位集落的なものが存在していたのであろう。ただSH-4については明瞭な柱穴が検出されていないので、住居としてとらえて良いのか、それとも違う用途に使用されていたものか今後の類例の増加を期待したい。

今回は道路部分のみの調査であり削平をかなり受けている可能性を考慮すれば、かなりの広範囲に集落が形成されていたことが推測される。今回検出したのは、ほぼ2時期で両者には時間幅がありこれを埋める時期の集落が未掘部分に存在する可能性が考えられる。今後の調査で今まであまり論及されていない山間部における古墳時代集落研究に良好な資料を提供してくれるものと考えられる。

4 中世の集落について

中世の遺構に関しても部分的にはかなりの削平を受けているものと考えられる。そのため遺構数としては本時代のものが一番多いもののやはり片寄った分布を示している。主な遺構として建物4、柵列6、溝、土塙と多数の柱穴がある。前述したように調査面積が狭いため遺構を検討するにあたっては、これら多数の柱穴が何らかの施設を構成していた可能性を十分考慮せねばならない。まず出土した土器であるが出土量の大半を占める土師質土器は口径・器高などの法量から大まかに3種類に分類できる（第62図）。土師質小皿は口径6.6～8.8cm、器高0.9～2cmの範囲におさまるもので、底部はほとんどがヘラ切りであるが中には糸切りのものもある。杯はおおまかに2種類に分けられここでは杯A・Bと呼称しておく。杯Aは口径11cm前後、器高4.2cm前後、杯Bは口径13.4～14.2cm、器高3.4～4.3cmで底部はいずれもヘラ切りである。その他の器種として台付き小皿、鍋などがある。また、その他に瓦質の羽釜、勝間田焼小皿、

埴、備前焼、青磁、白磁、天目がある。次ぎに当地域におけるこの時期の土師質土器編年はまだ確立していないため、これら土器の共伴する他器種などから時期を推測してみたい。一括資料としてSK-21、P-5~7など良好な資料がある。特にSK-21と



第62図 土師質土器法量分布図

第1次調査の一括資料（第20図10~16）からこれら土師質土器に勝間田焼が伴う事がわかる。この勝間田焼に関してもまだ不明瞭な部分が多く、一般には11世紀後半から13世紀（註9）が操業時期と言われている。これについては土師質土器との共伴関係などを含め今後再考せねばならない点が多い。次ぎにこれら土師質土器とは共伴しないもののある程度時期が限定できる備前焼や輸入陶磁器から考えてみたい。備前焼はすり鉢が出土している。これは備前焼編年のIV期に相当し、概ね14世紀末~16世紀末（註10）が考えられる。さらに輸入陶磁器として青磁、天目、白磁があり、いずれも断片ではあるが、青磁は龍泉窯で焼かれたもので、13世紀末~15世紀である（註11）。また、第33図4の内面に魚が描かれている皿は類例として笠岡市・鍛冶屋遺跡がある（註12）。鍛冶屋遺跡では時期を13世紀の範疇としている。以上から、中世集落の存続期間はおよそ13~15世紀の長期にわたるものと考えられ、その中の14世紀前後がその中心であったと考えられる。なお土師質土器を全体的にみてもさほど時間幅があるものとは考えられず、土器編年についても今後に譲りたい。

次ぎに遺構であるある程度の時期幅があるものの土器編年が確立していない現状では時期別の遺構の変遷をたどる事は困難である。これについては今後に譲るとして、遺構・遺物・文献等の面から遺跡の性格について簡単にふれてまとめとしたい。ここの小字名は第3図にもあるように「正善庵」が大半を占める。この地名の由来についての詳細は定かでないが『作陽誌』（註13）によると寺院があった事がわかる。さらに字名図を見ると「正善庵」は横野川の左岸に長方形に区画された地域であり中央北側も「大熊」によって方形に区画されている。この区画を遺構全體図に入れてみると（第61図）、中世遺構の主要なものはこの「正善庵」の区画内にある。そして一番南辺の区画外にあるS A 5・6は柱穴がしっかりとしており、3間の内中央部分がやや広い事などから、門跡の可能性が考えられる。またS B 1~4は小規模な倉庫的なものであろうか。またS D 9は南北から東方向に流路をかえており小字の「大熊」の区画線を延長すればほぼ一致する位置にある。その場合、この区画内にも柵列や土壤など遺構がなかり密集しているので、何か中心的な建物群があった可能性がある。たまこの区画外で検出したS

B 5 はかなり立派な建物であるのでこの部分にも建物群がある可能性が考えられる。また、少量だが瓦片も出土しているので、建物の一部が瓦葺であった可能性も考えられ、出土遺物に占める輸入陶磁器がある程度多い事などから、一般民衆の集落と言うよりは字名が示すように寺院が存在していた可能性が大きく、今回検出した建物群はその寺院の関連施設と考えられる。

また、余談ではあるが本遺跡の西0.5kmに存在する中山神社を訪れた一遍の様子が『一遍聖絵』の中に残されている。それによると中山神社の楼門、拝殿、本殿、回廊などの建物群の他に参詣する人々や門前の参道周辺の建物の様子などが克明に描かれている。この絵巻物は正安元年(1299年)に完成されたとされるもの(註15)で、およそ本遺跡と同時期と考えられ、この絵巻物に書かれている人々や建物の様子などは本遺跡の性格など考える上で非常に参考になるものである。

以上の結果から中世の集落に関して言えば、古墳時代の集落推定域(第2図)より北側に片寄った分布範囲が考えられ、そのため今後調査を行うにあたっては、古墳時代集落推定範囲外の北部を含めたやや広い範囲で調査を行う必要がある。

(註1) 鎌木義昌・江坂進「岡山県御津町原遺跡」『瀬戸内考古学2』 1958年

(註2) 高畠知功他「谷戻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』岡山県教育委員会 1976年

(註3) 二宮治夫「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12』岡山県教育委員会 1976年

(註4) 平井勝「岡山における純文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備第10集』古代吉備研究会 1988年

(註5) 南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」「私たちの考古学7」 1956年、(註4)にも資料が紹介されている。

(註6) 津山市での調査例は、クズレ塚古墳の下層から焼けた砾群と無文土器などが、最近では西部公園造成に伴う発掘調査の大間遺跡で押型文と無文土器が出上っているぐらいである。これらはいずれも早期の所産で、今回のよう晩期の例は初めてである。行山裕美・小郷利幸「崩れ塚古墳群・クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市教育委員会 1990年、大間遺跡については現在調査中である。

(註7) 行山裕美「西吉山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会 1985年

(註8) 山辺昭二「須恵器大成」角川書店 1981年

(註9) 伊藤晃「第11章 窒業」『岡山県の考古学』近藤義郎編 吉川弘文館 1967年

(註10) 關塙忠彦「備前焼」考古学ライブライー60 ニュー・サイエンス社 1990年

(註11) 上田秀夫「14-16世紀の青磁碗の分類」『貿易向船研究No.2』 1982年

(註12) 岡田博他「銀治原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告70』建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会 1988年その他の類例として津山市二宮遺跡がある。高畠知功他「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会 1978年

(註14) 止木輝雄・欠吹金一郎『新訂作略法』 1912年

(註15) 津山市史 第二卷 中世 津山市史編さん委員会 1977年

図 版



調査区全景（西から）



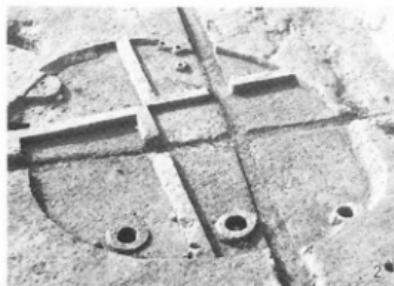
1. 調査区遠景（北東から）



2. 調査区土層（A-12区，北壁）



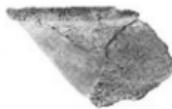
1. 第1次調査全景（南西から）



2



3



3

4



6

2. 住居 1 (西から)

3. 住居 1 及び遺構に伴わない弥生土器

4. 住居 2 (南から)

5・6. 住居 2 出土遺物

図版 3



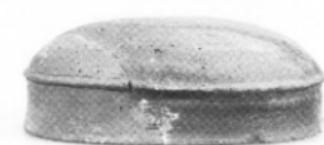
1



2



3



4



5



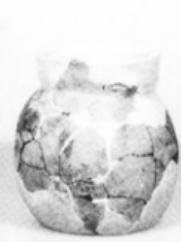
6



8



7



9



10

1. 住居 3 (西から)
2. 住居 3 遺物出土状況
3～5. 住居 3 出土遺物1
6～10. 住居 3 出土遺物2)



4



2



3



5

1. 住居 4 (北東から)
2 ~ 5. 住居 4 出土遺物



6



8



7



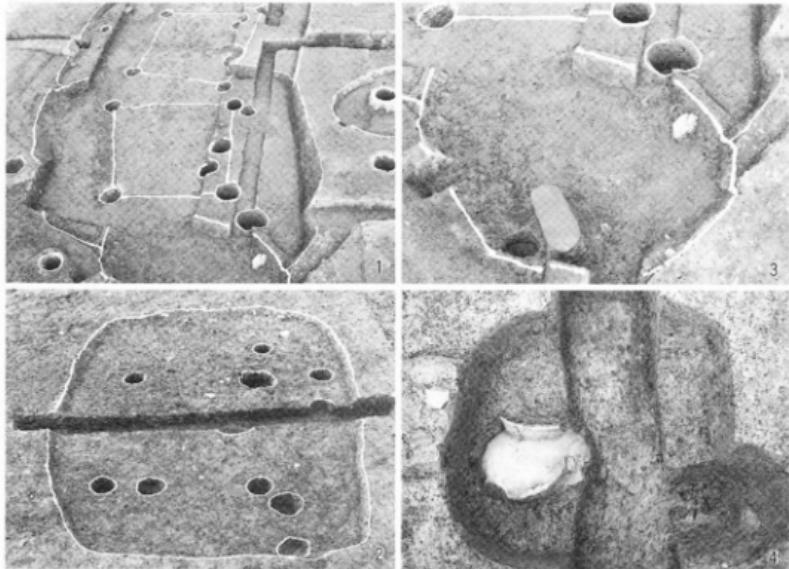
10



9

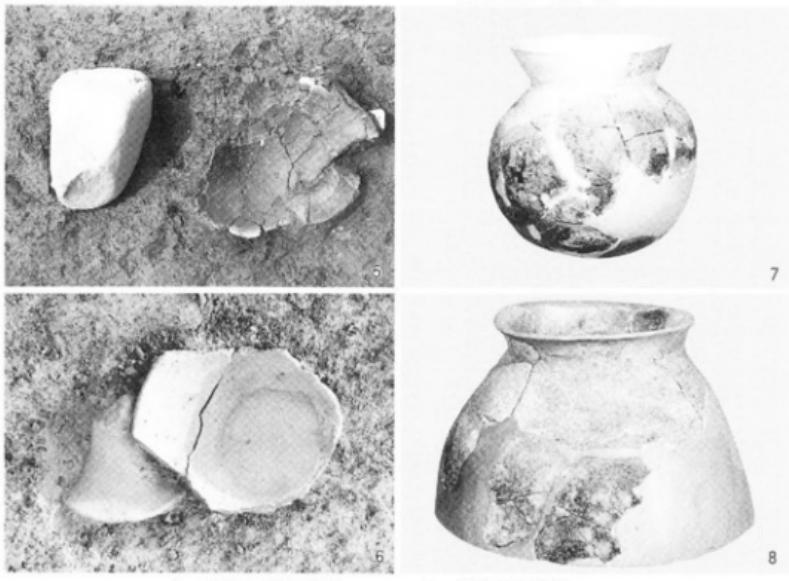
6 ~ 8. 造構に伴わない中世遺物 9 ~ 10. 猿文時代の遺物

図版 5



1. 住居 5・6 (南から)
2. 住居 7 (東から)

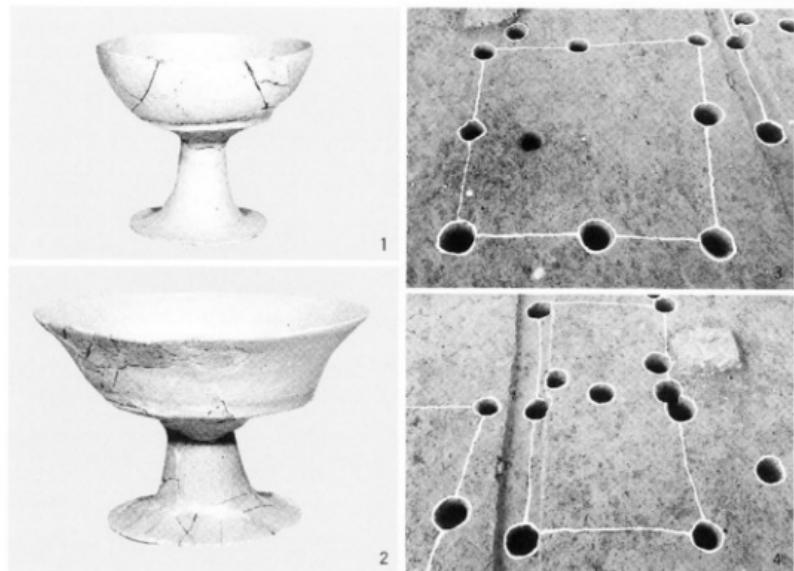
3. 土壌 1 (南から)
4. 土壌 6 (北から)



5. 土壌 9 (北東から)
6. 柱穴 1 (北から)

7. 土壌 9 出土遺物
8. 遺構に伴わない出土遺物

図版 6

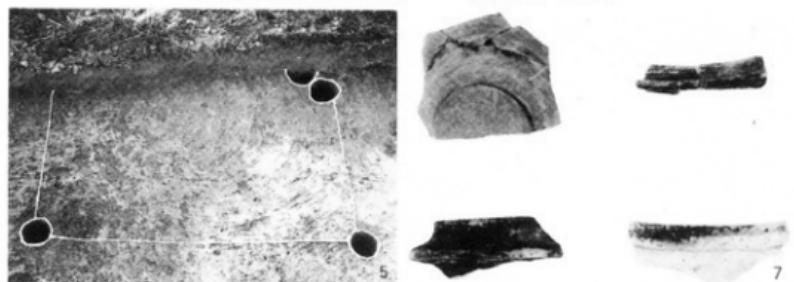


1. 柱穴 1 出土遺物

2. 造構に伴わない出土遺物

3. 建物 2 (南から)

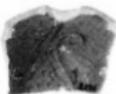
4. 建物 3 (南から)

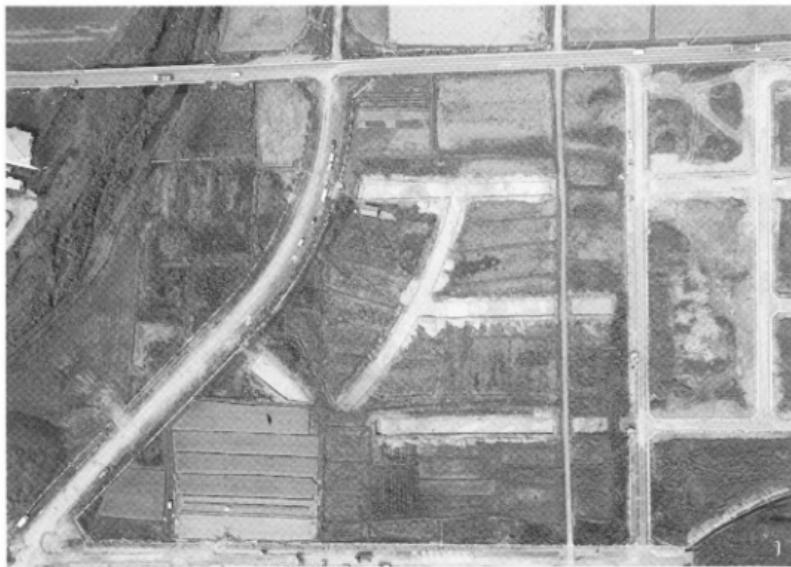


5. 建物 4 (東から)

6. 出土鉄器 (第1～3次調査)

7・8. 造構に伴わない出土遺物





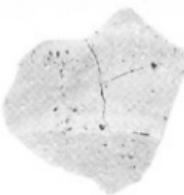
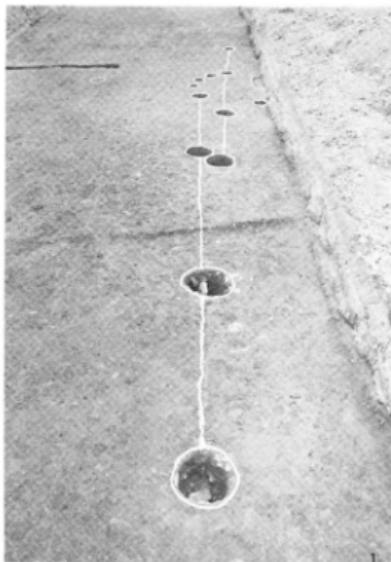
1. 第3次調査全景



2. 住居 8 (西から)
3. 住居 8 遺物出土状況

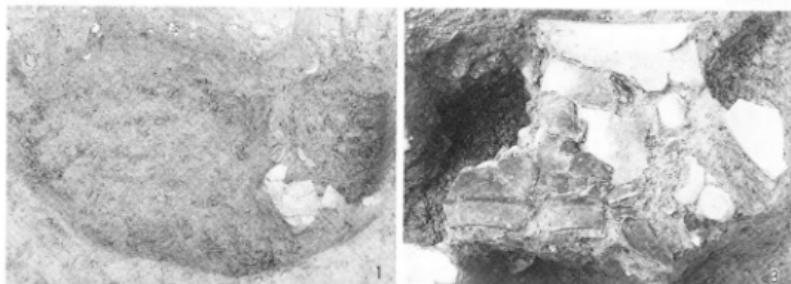


4・5. 住居 8 出土遺物
6. 土壌14出土遺物



4. 溝 8, 土壌18・19 (西から)
5. 溝 9 (南東から)

6. 溝 9 石出土状況
7. 溝 9 出土遺物



1



2



2



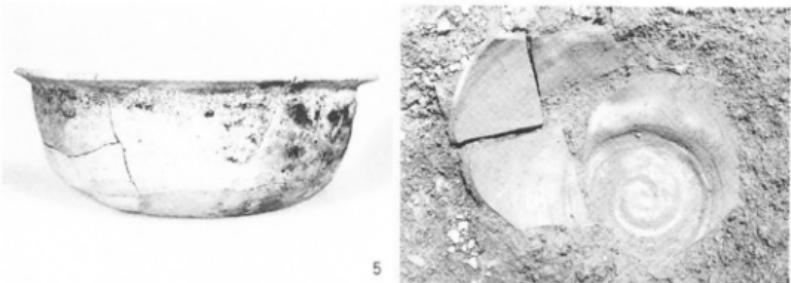
4

1. 土壌17（南から）

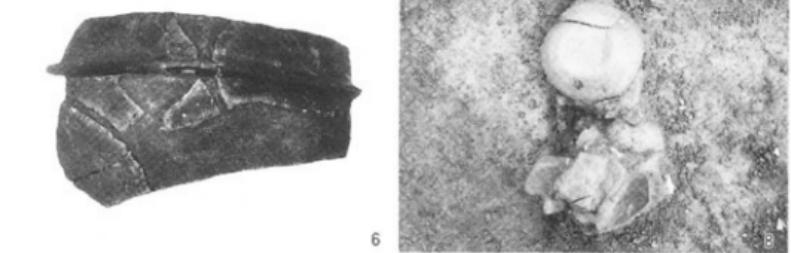
2. 土壌21（南から）

3. 土壌21遺物出土状況（南西から）

4. 土壌21遺物取り上げ状況（南から）



5



6

5・6. 土壌21出土遺物



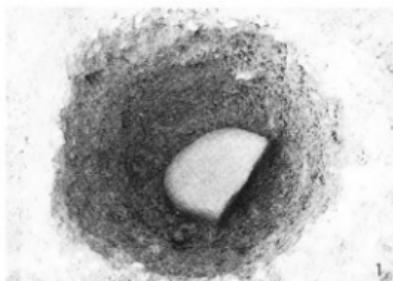
5



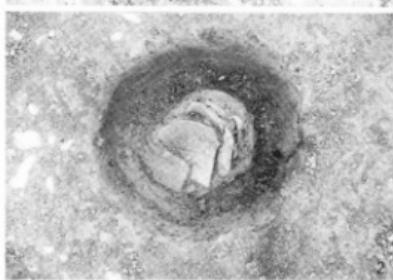
8

7. 柱穴4

8. 柱穴5



1



2



3



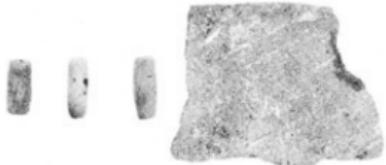
4

1. 柱穴 6
2. 柱穴 7

3. 柱穴 1～4 出土遺物
4. 柱穴 6 出土遺物



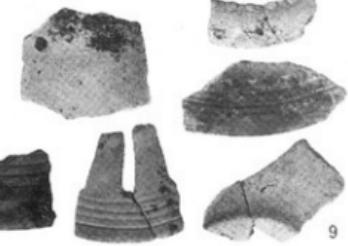
5



6



7



8

5～8. 遺構に伴わない中世遺物
9. 遺構に伴わない弥生土器

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第44集

正善庵遺跡

平成4年3月31日発行

発行 津山市教育委員会
岡山県津山市山北520

印刷 有限会社 美成
岡山県津山市平福177-2